



大魔法使いの幼馴染みに
わからせ青空愛蜜H！

～私以外を眠らせての

野性的野外SEXで連続絶頂～

第1話

昼前の街中は幾重にも重なる音楽や活気のある掛け声で溢れていた。

祭りの最中、ふと視線を感じて横を向く。

「やっと見つけた。10年ぶりでも見間違えない。ずっと会いたかった……」

偶然尋ねた露店通りで出逢った顔に、懐かしい記憶が蘇る。

「エ、エルレオ……！？」

私よりも背丈の小さかったはずの幼馴染は、顔立ちも身長も記憶の中の少年とは大きく異なっていた。

それもそのはず。エルレオは大魔法使いと称され、王国中から憧れられる存在だ。

「まさかこんなところで会えるなんて……」

「ほんと！ 久しぶりだね、大きくなったね」

突然の出来事に興奮する。

喜びと懐かしさ、会ったら話そうと思っていたこれまでの出来事が一気に込み上がる。

「会えて嬉しいよ……」

「私も！ ってちょっと……」

不意に、優しく覆い被さるように抱き着かれる。

幼馴染とはいえ、エルレオは今や立場もある大魔法使い。常に人目を気にしなければならない。

公共の場でハグなんて……。そう思う理性を脇に置いて、久しぶりだからと私もエルレオの背中に両手を添える。

「立派な魔法使いになったね。情報はずっと聞いてたよ。頑張ったんだね」

「ああ。キミに相応しい人になりたくて……」

年月や実績を積み重ね、見た目も成長したエルレオだけど、幼げなところはちっとも変わっておらずクスリと笑ってしまう。しかし逆に、まだ弟のように思っていて良いんだと安心感もあった。

薄目を開けて周囲を見る。

収穫祭の真っ只中であって浮かれた街の人々は抱き合う私達 2 人を気に留める人はほとんどいなかった。

今日は年に 1 度の都の祭り。4 日間に渡って行わ

れ、国中から多くの人が集まり、賑やかどころではなく盛り上がる。

商人や冒険者、魔法使い達にとっては稼ぎ時や人脈作りのチャンスだ。取りまとめる各地方のギルドも多忙である。

都にある中央ギルド職員でありながら都を離れていることが多い私も祭りの前後は都に戻って事務仕事に追われていた。

今はその多忙の中で得られた唯一の休日。

そんな中でこうしてエルレオと再会できたのは奇跡のような幸運だった。

「何度も中央ギルドに行ったんだけどね。なのに会えなくて……、おかしくなりそうだったよ」

「ご、ごめんね……」

素直すぎる言い回しに苦笑いする。

魔法の才がなかった私はそれでも魔法に関わる仕事がしたくて猛勉強し、王国中央ギルドの職員試験に合格した。

魔法に携わってはいるものの事務がメイン。各地方のギルドと書簡のやり取りをするため年間の多

くを馬車で過ごす。だから冒険者や魔法使いと顔を合わせることは意外と少なかった。

「会えていなかったけど私は寂しくなかったよ」

「っ！」

エルレオの顔が上がる。

「エルレオの頑張りはすぐにギルドの噂になるから。大魔法使い様だもんね。どこに行っても、どの街でもみんなエルレオに感謝してたよ」

目を丸くしているエルレオに微笑む。

実際ほんとのことだった。

千年生きていても言われる巨龍の暴走を鎮めた時は、国から勲章授与され、辺境地でも銅像が立っている。それを見る度、思い出す度にエルレオを誇らしく感じた。

エルレオの頑張りが自分のやる気を――、

「オレは寂しかった」

「え？」

抱きしめていた手が私の肩に置かれる。

真っ直ぐ見つめてくるエルレオは頬こそ紅くなっていたが、表情は銅像にあった通り真剣そのもの。

「10年間も会えなかったのは寂しいよ。だからもう絶対に離さない。どこにも行かせない」

「エルレオ……、もしかして……」

短い問いにエルレオはゆっくり頷いた。

記憶の片隅置いていた嘘のような本当の記憶。初プロポーズを思い起こす。

「約束通り、世界一の魔法使いになった。オレと結婚してくれ」

「あっ！ んっ……！」

顔を近づけられ、返事する間もなく唇を重ねられた。断る隙も頷く暇もなく。

不意に奪われたファーストキス。昨日まで男っ気のなかった私が、名実ともに優れた大魔法使いに、10年ぶりに再会した幼馴染にキスされ、舌を舐められようとしている。

さすがに人目をはばかった。

「ちょ、ちょっと待って……！」

顔を逸らしてわずかながら距離を開ける。

「い、いきなりすぎるよ！」

「10年もおあずけだったんだ。いきなりじゃない。

こっちはもう我慢できない。今すぐ教会に行きたいくらいだ」

「それはさすがに急すぎるよ！　　というか結婚って……」

興奮気味なエルレオを置いて私だけでも冷静になろうと頭を落ち着かせる。

逃がさないと言ったエルレオの言葉は偽りじゃなさそうで、肩に置かれていたが腰の裏に回っていた。

「私、あの時のプロポーズは冗談だと思ってて……」

「そうだろうね。けどオレは本気だし、キミも頷いてしまったんだから責任を取ってもらわないと」

顔を見なくても真剣な表情が視線で伝わる。

10年前、エルレオは魔術学院入学のために小さな村から旅立った。その際、無邪気に笑いながら「オレ、王国で一番の大魔法使いになるよ。その時は結婚してね」と明るい声でプロポーズしてくれたのだ。

まだ背丈も小さくお互いに幼かった。私は真に受けず、学院生活への不安が軽くなれば良いなという気持ちで頷いた。

まさか本当に成し遂げるとは思っていなかったから……。

「それに……、エルレオは天才だし、大魔法使いにもなったんだから、良いお嫁さんとか見つかるだろうなって……。それにエルレオは弟だから……」

「はぁ……」

顔を曇らせたエルレオは首をがくっと折ってため息をつく。何かをぼやくが聞き取れなかった。

すると顔を起こして口角の上があった、初めて見る大人な表情を作る。

「オレは君にしか興味ないし、キミをオンナとして見ているよ」

「あ、えっと……」

うまく言葉が出てこなかった。目を合わせられず再び俯く。

そんなことを言われたのは初めてで、幼馴染みに密かに想っていた男性相手に言ってもらえて何も感じないはずはなかった。

どこからかエルレオの名を口にしたのが聞こえる。各地に銅像を建てられるほどの大魔法使い。国

を代表する若きカリスマ。人目のある場所で誰一人として気づかないなんてことはなかった。

「ちょ、ちょっと待ってね。どこか場所を変えてゆっくり話そう」

むしろ言い訳に使えろと考え提案する。

結婚するにしても心の準備がしたかった。幼馴染とはいえ立場が違う。貴族になって領地統治を任されていてもおかしくないような男性にいきなり嫁ぐなんて軽くは考えられなかった。

しかし――、

「言っただろう。絶対離さないって。世界一美しい女性と夫婦になるために努力してきたんだ。世界で一番、君を愛してる」

「エルレオ……？ あ、待って……んっ！」

再び、有無を言わさず口づけされ、今度はすぐに舌を入れられる。

熱烈なプロポーズよりも不穏な様相に引っ掛かったが、周囲の視線がある中でキスする羞恥心から深く考えられない。

何とか舌を追い出し、首を横に向ける。

「ほら、みんな見てるからダメ、だ……、えっ！」

目の前に広がる光景に戸惑い、慌ててエルレオの身体を強く押して遠ざける。

周囲を見回す。

「嘘、どうして……！」

辺りの人達みんなが倒れ込んでしまっていた。男性も、女性も、商人も魔法使いも、荷台を引く馬もすべて。

「だ、大丈夫ですか！？」

女性2人組に急いで駆け寄る。どちらも息をしていて脈も正常。他の人達も同様だろうか。だとするとまるで――

「睡眠魔法……？」

ハッとしてエルレオの顔を見ると大きく頷いた。

いつの間にか街中から音が消えている。キスに気を取られてしまってこんな大きな変化に気づかなかった……。

「結界で街を覆って、街全体に睡眠魔法をかけた。地下でも、城の中でも、どこにいても何をしていても……。これで人目を気にせずキスでも、なんでも

できちゃうね」

「街全体……」

簡単に言うが、とてつもないことだ。例え出来たとしても思いつかないし、普通はやらない。

つまり、私の目の前にいる大魔法使いは普通でないことをやってしまったのだ。

「当然リスクはあるよ。魔力が底を尽きかけるってことなんだけど、これが問題でさ。オレ……、魔力が減ると性欲が増すんだ」

「……っ！」

その言葉の意味を知って息を飲む。

エルレオの下腹部がスラックスの上からわかるくらいに膨らんでいた。

異性との交際経験のない私でも何を意味しているのかは理解できる。ただ大きくなっただけではないということも。

別の言い方をすれば、戻すためにどうするべきか、もっと他の言い方をすれば、エルレオが何を求め、私がナニをされてしまうのか……。

「えっと……」

見つめていた視線を逸らし、続ける言葉を模索する。

一方エルレオも照れくさそうに頭に手を置き、白い歯を見せながら申し訳なさそうに笑った。

「ああ、えっとね、ちなみにこうなると射精しても小さくならない絶倫？ ってやつになるんだ。しかも一度こうなると魔力が戻るまで元に戻らなくて、全回復まで丸2日近くかかるから……、ごめんね」

明るげに可愛く言っているがちっとも可愛くなかった。

ゆっくりと距離を詰められる。

キスされ、プロポーズされ、さらには国を巻き込んだとんでもない状況に置かれて、目の前の幼馴染と迫る問題を直視できなかった。

逃げる？ 無理だ。これだけのことができる魔法使いからは逃げられるはずがない。それならどうする……？ 丸2日持続する精力なんて1人で相手にできるものなのだろうか。

処女の私にはわからない。

「そ、そういうのは結婚してから……」

「そういうのって……、ナニ？」

いたずらっぽく笑った表情が瞳に移る。

「なにして……え、えっと……」

「Hのこと？ SEXのこと？ オレ、本でしか読んだことないからわかんない」

恥ずかしくて続きが言えないでいる私の耳元で煽るように囁いた。

本で読んだり、同僚の愚痴で聞いたりしたことくらいしか私も知らない。

「気持ちの良いことオレに教えてよ、姉さん……」

「っ！ ね、姉さんって……、10年前も言ってくれたことないのに……」

突然呼ばれた愛称に背中がむず痒くなる。

置かれた状況をまだ現実として受け止めきれず、エルレオの言い回しも冗談みたいで、なんだか夢を見ているようだった。

手を取られて再び正面を向いて立ち上がってしまう。

「ぼーっとしているね。催淫魔法はかけてないんだけど……、あ、使った方が良いかな？ その方が素

直になれるかもしれないよ」

「い、いらない！」

慌てて首を振る。顔が沸騰したように熱くなった。

「そっか、催淫魔法が必要ないくらいHなんだ。魔法無しでオレのちんぽの相手をしてくれるんだね」

「ち、ちがっ…！　そういうことじゃなくてっ！」

「冗談だよ。催淫魔法なんて無粋なことはしない。オレは、ありのままのキミが好きなんだから……。それに……。魔法じゃなくてオレのちんぽで気持ち良くなってほしいしね」

後半の言葉も冗談であってほしかった。

私の後ろには気持ち良さそうに眠る女性がいて、そして周囲にも大勢の人がいる。

青空の下、いつ覚めるかもわからない人達の前で、私は着ているブラウスを捲られてブラの上から胸を撫でられた。

「あ、だめ。こんなところで……」

「こんなところじゃなかったら良いんだよね。だったらもう、どこでやっても一緒だよ。起きているのはオレとキミの2人だけなんだから」

確かに誰にも見られてはいない。しかし、自分の魔法で眠らせその寝入り加減を知るエルレオとは違い、私はちょっとした音で起きるのではないかという不安から今も気が気じゃなかった。

「そんなに気にしなくても大丈夫だよ。もしかして、みんなに起きてほしいの？ 見られたいなら今すぐみんなを起こすけど……？」

「ダメっ！ 恥ずかしいよ……」

羽目を外すためにエルレオを街の人達を眠らせた。この人達が起きていれば何かをされることはないとも考えたけど、どうやらやめてくれる気はないらしい。

「なら、オレのことだけ見ていてよ。周りが気にならなくなるくらい、2人で一緒に気持ち良くなろう」

ブラホックを剥がされ、足元にピンクのブラがポツリと落ちる。

拾わないといけないのに、胸を揉む手を抑えるために両手が塞がってしまった。

「柔らかくてもっちりしてる……。触り心地が良くて癖になるね」

「そんなの、よくわかんない……。あっ……。！」

左右それぞれの突起に添えられた親指を小さく弾かれる。次に人差し指で押し込まれたかと思えば、親指と一緒に挟んでゆっくりと擦られた。

「んっ」

「あ、痛かった？ 初めてだから加減がわからなくて。どうしたら気持ち良いか教えて」

乳首をさすって慰めてくる。

さすっていた指が段々と早くなって行って、私の口からかすかに声が漏れると満足したように手を止めていやらしく微笑んだ。

「反応が可愛すぎるよ。胸を触っただけなのに、もうそんなに楽しんでくれるなんて、オレも益々興奮しちゃう」

私の反応を都合よく受け止めたエルレオは、調子づいておへそより下に手を伸ばす。

「そこは……。！」

長いスカートの上から股間を押されてしまう。一度離れた後に再び股を探って見つけた急所を指で突かれる。

「やめ……。そこはほんとに……」

「逃げちゃだめだよ」

腰を逸らして追う指から離れる。エルレオの左手に背中を抑えられて腰だけしか逃げられず、またすぐに大事なところを捕まえられた。

「待って……！ あっ、乳首……。舐めるのもダメっ！」

露出したままの胸に顔を近づけられ、下から掬い上げるように舌を這われる。

舐められるだけじゃなく、強めに吸われてしまう。

「固く立ててくれてたから舐めやすいよ」

「い、言わないで……」

恥ずかしくも固くしてしまった乳首を口に含まれ、ちゅぶちゅぶとわざとらしく立てられる音が私の羞恥心を刺激する。

「スカートが邪魔だね」

「えっ……。きゃあっ！」

スカートのホックを外され、太腿と下着が露出する。股の間に風が通り、涼しさが一層恥辱感を掻き立てた。

さらになんと、ショーツに手を入れられ股間を直に触れられる。

「やっ……！　そこ……！」

抵抗しようとエルレオの腕を掴むが、ショーツに侵入して秘部に触れる手を引き抜けず、ただただ好きにされるだけだった。

すると、アソコをゆっくりとこじ開けるように指を入れられる。

「んんっ！」

アソコから来る異物感が全身を刺激し、味わったことのない違和感に不安が募る。

挿入れて抜いてを繰り返されて、その度にエルレオの指が湿っていった。

「濡れてるね。まだ出てくる……。ほら、くちゅくちゅ鳴る音がどんどん大きくなる。聞こえる？」

「わかってるから、それ以上、言わないで……。触るの止めてっ！」

中を抉って水音を鳴らしてくる。

溢れる愛液を止めたくとも、エルレオにいじられてしまっている限り、自分ではどうしようもなかつ

た。

「おっと胸も舐めてあげないと……。指先の感触が、キミのおまんこを触るのが気持ち良すぎて忘れちゃってた」

「んっ……。あっ！」

再び胸も責められる。股間を搔く指も容赦なく責め続けたままだった。

抵抗しても無意味で、我慢しているのに声が漏れてしまう。せめて感じないようにと意志を強く持つが、人にされるのは自分でするよりも刺激的で、イクのを我慢するのが精一杯だった。

「やっ……。あっ……。エルレオ、もう……。ダメ……」

「ん？ イっちゃう？ 良いよ。見ていてあげるから」

胸から顔を離し、責める指をさらに激しくして私のその瞬間を見つめる。

「たくさんの人達の前だけどイって良いんだよ。みんなにキミの可愛い声を聞かせてあげようよ。見回りの衛兵とか、レストランの気難しいオジサンとか、

小さな子どもにまでキミの感じた顔を見せつけよう」

中に入れた指で愛液を掻き混ぜながら、さらに辱める言葉を浴びせる。

何も言い返せないどころか興奮してしまっ—

「あっ、いや……、ダメ！　ダメっ！　ああっ……！！」

性感覚が限界を超え、絶頂と共に自分でも恥ずかしい声を上げてしまう。

身体が痙攣し、愛液が溢れ出る。エルレオの手からも下着からも零れて地面を濡らした。

頭が真っ白になりかける。身体に力が入らない。周囲に大勢の人がいなければ、刺激を与えた相手に身を委ねてしまいそうだった。

アソコから指を抜かれると、足に力を入れていなかった私はエルレオに支えられながら地面に腰を下ろした。

「思い切りイったね。そんなに気持ち良かったんだ……。オレも嬉しいよ。キミの新しい一面を知れて」

顔を覗き込むようににこりと笑う。

「見ないで……」

顔を背けるとすぐそばで眠っている男性が視界に映った。まだ起きる気配がないことに安堵しながらも、人前でイカされてしまった事実を肌実感してしまう。

「こんなに近くにいるのに、愛らしいキミのイキ顔を見れなかったなんてみんな不運だよ。独り占めできたオレは幸せ者だ」

「も、もう……。そんなこと言って……。そろそろ良いよね。とりあえずどこかの宿に——って、えっ……！」

囁かれた言葉を軽く流すと、金属同士が当たる音と、布が擦れる音がした。風の音しか聞こえない街中で、エルレオがベルト外そうとしているということはすぐにわかった。

「最初に言ったとおり、オレの魔力が回復するまで性欲が治まらない。キミが気持ちよくイっただけ。今度はオレを気持ち良くしてもらわないと……」

「そ、それ……。やっぱり……」

たくましく反り立った一物を見せつけられる。

本物を見るのは初めてだけど、先ほどまで私の身体に入っていた指と比べて太さも長さも全然違う。

「舐めて……」

「っ！」

短く呟かれる。

当のエルレオも緊張していることがわかる。

以前に同僚から、無理矢理にアソコに挿入してくる最低男とは別れた方が良いし、挿入されそうになったらフェラをしてでも止めるべきという格言をもらった。

エルレオは最低男ではないかもしれないということはさておき、舐めるよう提案するかを迷っていた私は、舐めるよう促された場合のことは考えていなかった。

いざフェラをするとなるとそれはそれで勇気がいる。

イカされ正常な判断ができなくなっている今の私には、拒否して逃げる勇気も湧かなかった。

「は、初めてだから、間違えたらごめんね……」

震える手で恐る恐るエルレオのおちんちんに触れる。

「愛があればきっと不器用でも気持ち良いよ。ていうか、すでに暴発しそうなくらい膨らんでるから、キミの口に触れるだけで射精するかもしれない」

それならなるべく早く済ませようと、根元と中央より少し上の辺りを手で包む。

息を整えてゆっくりと舌先を先端に押し当てる。先端から透明な汁が出ていた。

無心を心掛け、歯を立てないようにゆっくり舐める。

「上手だね。初めてって嘘みたい……」

「う、うるさい……」

恥ずかしくなり、首を振って再度目の前のおちんちんに集中する。

本を読んでいたことと無駄に聞かされた同僚や女性冒険者からの愚痴、そして、密かに1人でシミュレーションしていた成果が出ていた。けどそれは異性には知られたくない秘め事だった。

しかも、想定していたその相手が実はエルレオだ

ったということも……。

「おっと……、今の、すごく良い感じだよ」

唾液を多く含めた口の中におちんちんを入れる。口を前後に揺らしながら舌で根の周りを舐め取った。

「ん……、精子が上がってきた。服にかかるし、そのまま口の中に出すね」

「まっ……！ んんっ！」

おちんちんが急激に膨らむ。射精の合図に気付くのが遅れ、頭を掴まれてしまう。

確かにブラウスを汚すのは嫌だけど、口の中に射精されるのは想定外だった。

「出る！ 出す！」

「ん～～～～っ！！」

勢いよく発射せる。粘り気の強い液体がどくどく口の中に注がれた。

「んんっ！ んっ！！！」

腰を揺らして最後の一滴まで絞り出される。

息が苦しくなり、少し飲み込んでしまう。

「けほっ……、えほっ……、」

ようやく解放されて、手で作った皿に精子を吐き出す。

初めて見る精子は、私の唾液と混ざって泡立っていて、本の通り、白くて光沢がかった。

「ひ、酷いよ……。げほっ……」

口の中が苦い。ぬめり気も中々消さなかった。

手についていた精子を魔法で洗われる。

「ごめんごめん。ありがとうね。まさか本当にフェラしてくれるなんて……。すごく嬉しかったよ」

「あっ……」

謝罪かお礼か、涙目になった私にエルレオは優しくキスをした。

「今度はもっと深く繋がりたいな。2人で一緒に気持ち良くなろう」

「それ……。まだ……」

自身が言っていた通り、エルレオの男根は小さくなっていなかった。

一度射精すればお互い冷静に話しができるかも……。そんな淡い期待が崩れ去る。

ここまでくると、むしろ開き直った方が良いのか

もしれない。

「ん？ ちんぽがそんなに気に入った？ もっと触って良いよ。キミに触れられるのはとっても気持ち良かったから」

「そんなこと……！ エルレオはもっと隠して……」

じっとおちんちんを見つめてしまっていたことに気づく。

見ていた私は恥ずかしくなって視線を逸らすが、当のエルレオは堂々と見せつけてきた。

「見られて恥ずかしいようなものを舐めさせたり、キミのおまんこに挿入したいなんて思わないよ。だからもっと、よく見て……」

「あ……」

立ち上がって腰を前に出される。

視界に入るところかおちんちんしか見えなくなる。先ほどは薄っすらとしか感じ取れなかった匂いや熱気が色濃く伝わった。

半分近くまで私の唾液で湿っていて先端にはまだ精液が残っている。自分が一体何を咥えていたの

かを改めて実感した。

「オレはキミのすべてを知りたいし、オレの全てを知ってほしい。オレがどれだけキミを愛しているのかも」

「愛って……」

10年間も求めてくれていたというのは、整えられた今の状況を想えば嘘ではないと理解できた。

言い寄る女性はいくらでもいただろう。にもかかわらず丸2日も街全体を眠らせて私と過ごそうというのだから。

「けど……、わからないよ。だって私……、今のエルレオとは釣り合わ——」

唇に指を充てられて、言いかけた言葉を押し留められる。

「オレはキミを愛してる。だからキミは、オレを愛せるかどうかだけ考えて。一度でわからなかったら何度でも確かめてくれたら良い。時間はたくさんあるから」

「エルレオ……」

ただの性欲だけでここまでしているのではなく、

不器用な愛情がこんな形になっているのだと気付かされた。

もしも深夜にベッドの上で伝えられたなら迷わずプロポーズを受け入れたらろう。

「場所を移そうか。歩こう」

「あ、うん……」

そんな思いがようやく伝わったのか、手を差し伸べられて立ち上がる。

このままエルレオの部屋か宿まで連れられる。そして、身も心も曝け出して互いの凹凸を繋げて愛を確かめ合う。そんな人並な初体験を頭の中で思い描いた。

そうはならないとわかっているからこそその願望だった。

「初 SEX はもう少しムードのあるところが良いよね。広場の噴水前が好きかな。あそこは飾り付けが綺麗だし、ここより大勢の人がいるよ。みんな寝ているから安心して」

「あう……。私は、もっと普通がいい……」

手をぎゅっと握られ、広場に向かって足を進める。

「初めては特別だから、思い出に残ることがしたいっていうオレの我が儘かな。そんなに心配しなくても……。オレは何回でも出せるからさ」

さりげなくスカートとブラを収納魔法でしまわれ、痴女のような恰好のままで歩くしかなかった。

裾の長くないブラウスでは前からも後ろからも濡れた下着が丸見えで、手で隠せるのはお尻か、股間のどちらかだけだった。立った乳首もブラウスの上からくっきり見えてしまっている。

そしてエルレオもおちんちんをぶら下げたままだった。

とてもじゃないけど人に見せられるような恰好ではない。

地面に伏した衛兵のそばを緊張しながら横切った。

「エルレオ、服……。せめて着くまでは……」

「まあまあ……。どうせ脱ぐんだし。キミはどんな格好をしていても可愛いよ。無防備な姿も凄く良い……」

寝間着よりも薄着で、緊張が一向に消えない。

通った店のガラスに映った自身の姿を直視してしまい、一層恥ずかしくなって心臓の鼓動が早くなった。

「早く着いて……！」

たまらず呟く。

「そんなに SEX が待ち遠しいんだね。オレのちんぽも喜んでるよ」

「ちがっ！　なんでいつもいじわるばかり——」

「ほら、着いたよ」

反論を遮るように、大きく美しい城前で艶めく華麗な噴水に指を向ける。

いくつもの通りに沿ってたくさんの出店が立ち並び、老若男女、職業や種族を問わず人で溢れ、祭りでも最も賑わう場所。今は寂しいほど静かで、誰もが深い眠りについていた。

「オレ達は今から、ここで SEX するんだ」

「っ！！」

改めて口にされ、返す言葉を失う。

不覚にもアソコが疼き、下着のシミを広げてしまう。

「本当にここですかの……」

「そうだよ。国で一番綺麗な場所で、みんなの前で抱き合うんだ」

促されてさらに歩を進める。

多すぎる人達の間を縫うように、時折跨ぐなどもしながら噴水の傍まで訪れる。

「さあ……、ここに腰を下ろして」

「うん……」

噴水台の淵に座る。

太腿を寄せてブラウスの裾を引き、わずかでも下着を隠す。スカート1つないだけでどうしようもなく心細かった。エルレオにはもう下着どころか、大事なところを触れられている。それでも視線を遮断するもの、自分の身を守る物が欲しかった。

「緊張してる？ Hするのが怖い……？」

「う、うん……。初めては痛いって聞くし……、なんだか自分が自分じゃなくなってしまうような気がして……」

肩が震える。少し寒いとも感じたのは、薄着だからということだけではない。

「何も変わらないよ。キミはキミのままだ」

「……………。あっ」

「それに、ここは準備が出来てるみたい」

下着を撫でられ膣のある場所を探り当てられる。あっさりとショーツの中に手を入れられて、湧き出たばかりの愛液を指で掬っておまんこの中へ押し込んだ。

「んっ……！ ダメっ……」

「さっきよりも感じやすくなってるね。1度いったからかな？ 下着がもうぐしょぐしょ……。身体は刺激を求めている気がするけど……？」

ぐちゅぐちゅと水音を掻き鳴らされる。

イカされた時より動きが小さいのに、鳴っている音は大きい。言われずとも快感を求めている自分がいることを否定できなかった。

それでも、それを完全に受け入れるのは我慢する。

「答えられない？ だったら、オレが舐めてる間に考えてね」

「舐めるって……？ あ！ いやっ……！ パンツ下ろしちゃ……！」

正面にいたエルレオに下着の両端を掴まれゆっくり下ろされる。抵抗しようとしても力では勝てなかった。太腿を通して脚の下まで進まれる。

屈んで局部を隠すとエルレオはパンツを収納魔法で剥ぎ取った。

「それ、ズルい！ やだっ……！」

両足を開かされ、その間に陣取られたかつては弟のように思っていた幼馴染におまんこを直視される。

隠そうとする私の手を掴んで剥がし、伸ばした舌で誰にも見せたことのなかった大事な秘部を舐められる。

「やあっ……！ 恥ずかしい……。そんなところ、舐めたら……！」

口を密着されて愛液を吸ったり、舌で掻き混ぜたり、あるいはおまんこに侵入して穴を拡張されたり……。

いきなりの出来事に戸惑い、混乱する。感じるどころが多すぎて、いけないことをされているのに、抵抗もままならない。

私の腕を掴んでいたエルレオの手がいつの間にかおまんこを拵げ、アソコを丸見えにさせていた。おまんこの上に触れて突起部を見つける。突起部を摘ままれ、中を舐めていた舌にお豆を弾かれた。

「くっ……！　そこ、弱いから……だめっ！」

穴の周りやその中を舐められ、クリトリスもいじられ、全身の力が抜けていく。ぢゅぶぢゅぶと鳴らされる水音が背後の噴水に負けないうらい響いた。

全身に快感が駆け巡る。イカされるのも時間の問題だった。

「あっ……！　やあ……！　激しっ！」

貪るようなクンニで唾液か愛液かわからなくなるくらい、おまんこの周りが濡れていた。

「あ、エルレオ……！　もうダメ……」

1度目よりも早く、激しく絶頂を迎える。

「イクっ！　イっちゃう……！　イク……、んんっ
〜〜！！！」

一気に恥水が飛び出し、エルレオの顔面を濡らす。痙攣が長く続き、イってしまったことを実感する。

「はあ……、はあ……」

身体力が抜ける。舐められてイカされたショックもあって何も言葉が浮かばなかった。

恥ずかしくてエルレオの顔を見れないが、周りに大勢の人がいるのは忘れていなかった。

公共の場で、王城の前でおまんこを丸出しにされてイカされてしまった恥辱は、人に見られていたなら国外に逃げたくなるくらい大きかった。

「はぁ……。はぁ……。責任……。取ってね……」

「うん。一生背負うよ」

私の思い切った言葉をエルレオはあっさりと返す。プロポーズしたのはエルレオだから当然と言えば当然だった。

「はぁ……」

私は小さくため息をついた。

Hをする覚悟が出来たわけじゃないけど、ここまでされてこれ以上何もされないなんて思うのは無理があった。

手が早い男は最低で、何もしてこない男も最悪という同僚の台詞を思い出す。おちんちんを挿入れる前に2回もイカせてくれたなら、同僚基準ではきっ

と合格なのだろう。

祭りが行われていたはずの野外でなければ、ただど……。

周りに目を向けず、今は2人きりだと自分に言い聞かせて流されることにする。

エルレオは顔に着いた愛液を払い、左横に腰を下ろした。

「キスして良い？」

「っ……！ うん……」

口づけされ、アソコを舐めていた舌とおちんちんを舐めていた舌を絡ませる。今までのどの言葉よりも愛を感じた気がした。

「そろそろ、しょうか……」

「……」

頷く勇氣はなかったけど首を横にも降らな振らななかった。

両手を脇に入れられて抱き上げられる。身体の向きを変えられ、エルレオの膝の上に座らされた。

「あ……」

私のおへそにおちんちんの先が当たる。今からこ

れを挿入れられるのだ。

「後ろに倒れないようにオレの肩を掴んでてね。そしたら腰を浮かせて」

言われた通り肩を掴む。長いおちんちんと私の股に空間を開けた。

視線は下腹部から離せない。

本当に入るのか、こんな尖ったものを身体に挿入されるなんて痛そうで怖い。

肉棒と膣口が触れ合った。

「挿入れるよ」

「んっ……、んんっ！」

2本の指でおまんこを広げられ、芯の固くなったおちんちんを私の膣内に挿入れられる。

初めに中をこじ開けられるような、裂けるような痛みがして今はその名残と異物感に意識が向いた。

「んあっ……、はぁ……、あっ！」

「もう少しだよ。頑張って」

ゆっくりと沈むように入っていく、指よりも舌よりも太い一物が確かに入っていると実感する。

「凄い。キミのおまんこ、オレのちんぽに絡みなが

らもどんどん道が出来て行って、ちんぽをどんどん飲み込んでいくよ」

身体力が抜けていき、腰が沈んでいく。エルレオの言う通り、私の方から肉棒を求めているかのようだった。

「くっ……、んんっ！」

「一旦ここまでだね。よく頑張ったね。どう、痛くない？」

体勢的な意味での終着点に着く。

「だ、大丈夫かも……。少し痛かったけど……」

呼吸を整えながら答える。

挿入されたおちんちんが脈打つ度に、その大きさを実感した。

散々濡らされたせいか大きなおちんちんが自分でも信じられないくらいすんなりと入った。初めてなのに……。

「偉いね……！ キミと一つになれて最高の気分だよ」

痛みが少ないとはいえ、異物感と体勢の不安定さに気を取られ、中がどうかはまだ感じるこ

きない。

ただ、自分を愛していると言ってくれて、自分も好きかもしれない相手と体を繋げるのは嫌な気持ちにはならなかった。

それに、望んだシチュエーションではないとしても挿入れられてしまえば、正直私もその気になってしまっていた。

「しばらく慣らして、それから腰を動かすね」

「うん……」

頷くしかなかった。

私はエルレオの肩に置いていた手を離し、互いに抱き合うような体勢になる。腰に力が入らず、されるがままになった。

ブラウス越しに胸を揉まれる。

「あっ……」

薄く透けた乳首を摘まんだり捏ねられたり。首筋を舐められたりお尻を撫でられたり、全身を責められ放題だった。

「そろそろこっちもね……」

「んっ！ やっ……、ほう……、んん！」

私の腰を掴んで身体を前後上下に揺らされ、おちんちんでおまんこを刺激される。

さっきまでより深く入って奥の愛液も掻き混ぜられる。ぐちょっぐちょっと水音の鳴りも激しく、エルレオの腰がどンドン濡れていった。

「んやっ……、激しっ、もっと、ゆっくり……」

「まだまだだよ。これからもっと気持ち良くしてあげるからっ！」

愛液やおちんちんから出ていた透明の汁が中の滑りを良くし、激しく突く動きと連動して私の快感に快感を与えてくれた。

さらに激しくなっていく。

「あっ！ あう……！ だめっ……！」

もはや感じるだけになってしまっていた。エルレオはそれを嬉しそうに見て、満足気な表情で私の頬にキスをする。

「お胸も感じさせてあげるね」

「へっ……？ いやっ！ ちょっと、恥ずかし……」

魔法でブラウスを剥がされた。

全身に風が当って切なくなる。ついに全裸にされ

たのだ。

一糸纏わぬ無防備な姿。親以外に見せたことがない、見せてはいけないのに、街中でSEXをしながら晒される。

「とっても綺麗だよ。みんなに見てほしいくらい。すべすべつやつやで、触り心地も抜群」

「やだっ！ 恥ずかしい……！ 服、返して」

周囲だけでも何十人もいることを思い出してドキリとする。

「大丈夫。オレも裸になるから……」

そう言って自らも鍛え抜かれた体を披露する。たくましいとは思いますが、お互い全裸だからと言って私の気は紛れなかった。

SEXで感じさせられているだけでも恥ずかしいのに、周囲を気にしてしまうと余計に快感が増してしまうような気がした。

舌先で乳首を舐められて気にする箇所がさらに増えてしまう。何も考えられなくなるのも時間の問題な気がした。

「一生舐めても飽きないね。キミの身体はどこを舐

めても美味しいよ」

「んっ……、やだあ……。んっ……！」

「気持ち良さそうだね。ひょっとして、そろそろイっちゃいそう？」

限界が近づいてきた。

気付けば痛みも治まっている。

「いつでもイっていいよ。みんなにイクところ見てもらおうよ」

「だめっ……！」

お尻を掴まれ、お尻の穴もおちちんと繋がっているところも公にされている気がした。自分では隠すことが出来ない。

「もしかすると、寝たふりをしている人がいるかも。あそこの男性冒険者や、駆け出しっぽい魔女なんか薄目を開けてキミの無防備な背中を記憶に焼き付けているところかもね」

「っ！ んんっ！」

嘘だとわかっている。わかっているでも緊張して身体に力が入り、おちちんをより具体的に感じてしまう。

「ちんぽで突く度に零れる愛液にきっとみんな興奮してるよ。ほら、普通じゃ絶対に見られないキミのおまんこを見て、男性みんな勃起しているよ」

さらに固くなったおちんちんで、びちゃんびちゃんと鈍い水音を鳴らされる。

熱くなった身体の奥から急激に何かが込み上がってくる。

「もうっ……、ダメっ！ ああああぁっ！！」

快感が頂点に達して、おちんちんを挿入れられたまま愛液が溢れ出した。

背中を反ってしまうほどの衝撃的な感覚。

私は、初めてのSEXでイカされてしまった。

「おっと……」

全身の力が抜けて後ろに倒れそうになる。エルレオに抱かれて、その胸と肩にもたれかかった。

「気持ち良かった……？ オレは最高だったよ」

「……」

何も答えられない。いいえとも言えなかった。

噴水の音が大きく聞こえる。

俯いて水面を眺めると、みっともなく涎を垂らし

てしまっていた自分の顔が目映った。

「っ！」

慌てて口を拭う。

生まれたままの姿で、おまんこの中に挿入れられっぱなしであることにも気づいてとりあえずおちんちんだけでも抜こうとする。しかし、エルレオがそれより強い力で阻んできた。

「エ、エルレオ……？ おちんっ……」

「オレはまだ、イってないよ」

身体を揺らされ、中の一物を否応なく意識する。

男性がイクというのは射精すること。私の口を精子で満たしたように、私のおまんこにも精液を注ぐ気であるということだった。

「まっ、待って……！ あんっ！ 中は……！」

再びHを始められる。

私の身体だけでなく、エルレオ自身も腰を動かした。それに加えて、イったばかりということもあってかさらに感じやすくなっている。

私の意志に反して、むしろおちんちんを啜えるように体が沈んだ。

「全部入ってるよ。ちんぽが奥まで届いておまんこの行き止まりにぶつかって、凄く気持ち良い……！」

「だ、ダメ……！　そこ……、ダメ！　なんか……、感じちゃう！」

子宮にゴツゴツ当てられる。突かれる度に声が漏れた。

堪えようと目を瞑ると水面に映った自分の顔を思い出してしまい、恥ずかしさが倍増した。

「精子が上がってきたよ。わかる？　段々と膨らんでいくの」

熱くなったおちんちんが私の中で破裂しそうなくらい膨らんでいた。

「やだ……、だめ……！　外にっ！　舐めてあげても、いいからあつ……」

おまんこの中に射精される意味を理解し、恥辱に耐えながら嘆願する。

口から溢れ出るほどの量。膣内へ、子宮へ直に注がれてしまったら……。

「大丈夫。今さらだよ。精液の付いたおちんちんを挿入した時点で、オレは責任を取る覚悟が出来てる

よ」

「あっ……、うっ……」

エルレオの覚悟を知って急に抗えなくなってしまう。

感じてしまうことを拒めなくなった。そして、私自身3度目の絶頂の気配も察知した。

「出すっ！ 出すよ！ キミのおまんこに濃い精子を注ぐからね」

「イクっ！ 私も……、イっちゃう……！ んんんっ！！ あああ！！」

お互いに抱き合う力が強くなり、2人同時に達する。

イキながら、膣内に精子を流し込まれる。感じたことがない感覚。イってどうしようもなくなり、ただただ受け入れるしかなかった。

中のおちんちんが脈打ち、最後の一滴まで絞り出される。

力が抜け、ぐったりとする。

さすがのエルレオも腰使いと射精で疲れたのか少し息が乱れていた。

「あはは……。ちょっと疲れたね。まだまだ出来るけど、一休みしようか」

「私は全然出来ないけど……」

笑顔を向けるエルレオに私は呆れた顔を返した。

おちんちんを抜こうと腰を浮かせようとする、
またもやエルレオがそれを阻んだ。

「このまま、ちんぽを入れたまま街を歩いて回ろうよ」

「え……？」

エルレオの肉棒はまだまだ固いままだった。

第2話

互いの胸と胸を密着させ、肉棒を膣に入れられて抱き合ったまま街中を運ばれる。エルレオが1歩進む度におまんこからくちゅりと音がした。

一糸纏わぬ姿で風に当たっているのにむしろ熱い。一方のエルレオは裸で裸の私を担いで歩くことで幸せそうな表情を作っていた。

「今日は記念日だね。収穫祭の由来変更を国王陛下に――」

「やめてっ！」

不敬な言葉を遮る。やらないことだとわかっているけど聞いて楽しめる冗談ではない。

国を代表する大魔法使いのエルレオだが、すでに街全体に睡眠魔法をかけて祭りを台無しに……、いや、祭りだけでなくとも重罪だ。みんなが起きた後を想像してゾツとしてしまう。

「実はね、祭りはやり直せるんだよ」

「えっ……？」

不意の言葉に目を丸くする。

「この結界の中はね、ご飯も冷めないカビ着かない、作物や食料も腐らないし発酵しない。熟成もしないけど……。要するに状態保存の魔法をかけてるんだよ」

「……………」

続けて回復魔法と聖属性魔法を組み合わせたオリジナル魔法だと理屈を含めて説明されたけれど、ほとんど理解できなかった。

そんな規格外の魔法を開発して、しかもこれほどの範囲に影響を与えられるなんて……。たった 10 年間でどれだけの努力を……。

「で、でも……。だからって、みんなを眠らせるなんて！ 祭りを楽しみにしていた人達が……。んっ……。っ……！」

呆れつつ説教をしていると、エルレオに抱えられた身体を上下に揺らされる。固いおちんちんで愛液と精子を混ぜられた。

「ちょっと、今真面目に……」

「せっかく裸でHしながら街を歩いているのに、怒った顔をしていたら勿体ないよ」

やはり望んでやったこの状況を楽しんでいるようだった。

10年前は泣き虫で引っ込み症だったような記憶があるけど、今は心臓に毛が生えたようなあるいは人間とは思えないほどの強心臓の持ち主になっている。

私にずっと会えなかったことが原因というのであれば、申し訳ないような気もした。逃げたり避けたりしたことは1度もないけれど……。

「くっ……、んっ……。んんっ！」

腰を揺さぶられてまた軽くイカされてしまう。

大きな絶頂は迎えていないけど、もう3、4回ほど挿入れられたまま軽イキさせられていた。

エルレオには全てバレているし、イク度に唇を狙ってくる。

それでも私は身体を離せない。胸から落ちないように抱き返さないといけないことにも恥辱を感じた。

「あむ……。ん……。はあ……。エルレオ、これってどこに向かっているの……。？ そろそろ下ろし

て……。あと、恥ずかしいから服を返して……」

「デートだよ。裸デート。みんなに、オレとキミが深く繋がっている証を見てもらおうよ」

「お尻……、やめて……！」

お尻を掴まれ左右に開かれる。

股間の辺りが涼しくなった。もし人がいれば、繋がっているところもお尻も丸見えの状態だ。手で覆うが、上手く隠せているか自分から見えず不安になる。

「もう、バカ……！ やめてっ……」

お尻を揉まれながら首元には唇を当てられる。

行く当てもわからぬまま恥辱に耐えていると、見知った通りにいることに気づいた。よく知っている歩きなれた道。

「も、もしかして……」

「みんなに初SEXのお祝いをしてもらいに行こう」

背筋が凍った。

レンガ造りの大きな建物が見える。

王国中央ギルド。あらゆるランクの冒険者、依頼人、商人や鑑定士、聖職者や人間以外の種族、時に

は貴族や王族までもが足を運ぶ、人格と品格そして権威を試される場所だ。

王城の次いで厳かな雰囲気がある。

理由なく近づく者はいないし、ましてや私欲のために裸で踏み入った者は長い歴史の中で 1 人もいないはずだ。

地方に渡ることが多いとはいえここで働いている私は当たり前、エルレオもなじみがある場所だと思う。知っている場所、知っている人達の前を、こんな格好で進むことになるなんて。今朝まで思ってもみなかった。

「だめっ……！ いや……！ ギルドは恥ずかしくて死んじゃう！」

「おっと、暴れたら感じやすくなるよ」

「んっ……！」

エルレオの言う通り、足を下ろそうとジタバタするとおちんちんを余計に感じて体に力が入りにくくなった。

「大丈夫。みんな眠っているから」

全く安心できなかつた。人に見られているかの問

題じゃない。

噴水前やすでに歩いてきた道でもそうだけど、職場であるここで、同僚や知り合いの前なんかでSEXをしてしまったら、来る度会う度にそれを思い出してしまう。

顔を赤くするだけならまだしも、エルレオのおちんちんを思い出して下着にシミを作ってしまうかもしれない……。それじゃあ仕事に手が付かなくなってしまう。

「ほんとにダメ……！ エルレオっ！ エルレオってば……！」

短い階段を上がって歴史ある大きな木製の扉の前に立つ。

「キミがいつもお世話になってる人達にはちゃんと挨拶しておかないとね」

「それは嬉しいけど、起きている時にちゃんと挨拶したいって……。扉を開けないで……！」

聞き入れてもらえず魔法で扉を開けられる。すると中から人が現れた。

「っ！ いやあああああ！！！」

起きてる人が！　とうとう見られた！　心臓の鼓動が大きな太鼓のように響く。エルレオの胸に顔をうずめた。

一方、エルレオに動揺は見られなかった。

「おっと……。すまん、すまん」

背中の辺りに魔法の音がする。エルレオが1歩また2歩と足を進めたのが振動でわかった。

「ははっ、大丈夫だよ。この人は扉にもたれて眠ってしまっていただけだから」

「ふえ……？」

恐る恐る目を開けて後ろを見る。

出てきた相手へ手を向けて風魔法をかざしていた。大柄の男性が目を瞑って涎を垂らして眠っていた。

「はあああ～～～……」

緊張が解けて大きなため息が出る。

まだ心臓の鼓動は収まっていなかった。

エルレオに会ってから片時も気が休まらない。

「大丈夫？」

「う、うん……。びっくりしすぎちゃっただけ……」

「そうじゃなくて、もうここギルドの中なんだけど……？」

「！！！！」

言われてハッとする。人に驚いて忘れていたけれど、落ち着いている場合ではなかった。

振り向いて辺りを見回す。

眠り倒れている人達の中にいくつか見知った顔があった。見かけたことがある程度で親しい間柄ではないけれど、普段と今のギャップを感じて悶え死にそうだ。

「仲良い人はいる？」

首を振る。

いたとしてもわざと近づかれそうで言いづらい。

とにかく急いでここを離れたかった。

「もう、いいでしょ！ 早く違うところへ——」

「カウンターを覗いてみようか」

「っ！！」

引き返すどころか堂々と奥へ突き進まれる。

姿が見えないけど、カウンターではきっと受付職員が眠っている。気配を感じ取るスキルを持つエル

レオはいるとわかっていて向かっているのだ。

挨拶程度だが知り合いである受付職員達を思い出す。

ギルドの顔とも言える受付職員は人と接する機会が多く、仕事に真面目で強面冒険者にも怯まないメンタルエリートな人だけがその仕事に就くことができる。もしも、Hしながら街を歩いていたなんて知られたら今後ずっと侮蔑的な視線を送られる。知られなくても顔向けしづらくて、後日会う度にぎこちない挨拶をしてしまいそうだった。

「エルレオお願い！ 下がって……！」

叫ぶ声も虚しく、エルレオはカウンターを回り込んで眠っている3人の受付職員の顔を覗き込んだ。「こんにちは、幸せのお裾分けに来ました。って、あれ？ この男の人は初めて見るかも。若いけど強そうだな」

調子よく冗談を入れると、3人のうちの1人の男性を見て首をかしげた。細身で筋肉質。騎士家系の方だろうか、私も初めて見る新人職員。

顔立ちが整っていて女性冒険者から人気が出そ

う……なんて口にしたらエルレオは嫉妬するだろうか。

あとの2人は女性で、ギルド屈指の人気職員。愛嬌があって可愛らしい小柄な元魔法使いのコメント先輩と、高身長で脚長そして大きな桃を抱えた元騎士のリファリー先輩。どちらも面倒見が良くて優しいが、荒い男性冒険者などには厳しく物怖じせずルールを守らせるなど頼もしい存在。

「んっ！ エルレオ、それやめてってばあ！」

お尻を掴まれ結合部を見やすくされる。私が恥ずかしいのはもちろん。寝ているからって女性の前ですることじゃない。

さすがの2人も全裸の、しかも野外で営む男女を見るのは初めてだと思し、この状況を見れば顔を真っ赤にして剣や魔法で追い出そうとしてくるかもしれない。

特にリファリー先輩は騎士時代、宿舎で寝込みを襲ってきた不埒な男の一物を短剣で刈り取ったなんて話も聞く。

「あっ……」

今、眠らされている3人。見方によっては男性職員が女性2人を押し倒しているという風にも……。

私はエルレオにリファリー先輩の武勇伝を話し、起きた時に勘違いをすることがないように3人を離させた。

エルレオが顔を青ざさせているのが見ていて面白かった。

「オレも、ちんこを切られる前に先へ進もう……」

「な、なんで中に行くの！」

引き返して外へ出る気はないらしく、さらに奥へ突き進んでいく。

「こ、ここから先は関係者以外入っちゃダメだから、怒られるからっ！　ね？」

「大丈夫。オレ、キミを見つけるために色々口実作って自由に出入りできるようになってるんだ」

必死に懇願するが外堀は埋めてくれていたらしい。もしかすると私よりもギルドに詳しいのかもしれない。

まさかそうまでして探してくれていたなんて全く知らなかった。

「ねえ、エルレオ……」

「ん？」

ふと気になることがあった。もしかすると聞いちゃいけないことかもしれない。めんどくさい女だと思われるかもしれない。けれど気になってしまうと止まらなかった。

「どうして、手紙をくれなかったの……？」

エルレオは一瞬ハッと息を飲んで歩みを止める。やはり理由がありそうだった。

沈黙。

私は急かさず、エルレオの答えを待った。

ようやく出されたその答えは嘘のような意外なものだった。

「だって……、手紙だと照れるから……」

「どういうこと！？」

街全体に睡眠魔法をかけたり、野外でHしたり、好きだと言う私を連れてギルドを歩いたりするような人が手紙で照れるなんて思えない。

嘘を暴こうとエルレオの顔を覗く。

赤く染めた頬を隠すように目を逸らされた。

「え……、本当に……？」

演技には見えなかった。

さらに話を深掘りする。

まとめると、魔術学院時代は規律が厳しく、魔法使いとなってからも第三者の検閲を警戒し、私の家族やギルド職員達に手紙の中身を盗み見られたり一緒に読まれたりなどが嫌だったという実に可愛らしい言い訳だった。

「愛してるって直接言いたかったし、あちこち探して会えなかったけど元気になっているってことはわかっていたから、きっとすぐに会えるだろうって……。10年もかかっちゃったね」

「……………」

最後に、待たせてごめん、と言いたげに私を見つめ直して、おでこを合わせる。

連絡をしなかったのは私も同じ。エルレオの努力や頑張りを知って1人で満足していた。

こんなにも想ってくれているとは知らずに……。

10年間、あまり意識していなかったけれど、エルレオに対して心の中でどう思っていたのか……、こ

うして繋がってみてよくわかった。10年のうち1度でも私から連絡していれば、ここまで盛大な初Hを迎えることはなかったと思う。申し訳なさと切なさと、二重の意味で後悔した。

「んっ……」

肉棒を入れたままのおまんこが疼いてしまう。

「今、H穴がキュンってなったね」

「変な言い方しないで……！」

ごめんと笑うエルレオのおちんちんはずっと固いままで、絶倫と言っていた通り鎮まる気配がなかった。

これほどの性欲を今まで1人で処理していたのかと思うと怖ろしく思える。エルレオの妄想の中で私が一体何をされていたのか、聞こうと口を開きかけてやめた。再現されるのが怖い。

「エルレオ……、今まで、この睡眠魔法を使ったことあるの？」

肉欲に関する単語を避けつつ、気になっていたことを質問する。王都でそんな噂は聞いたことがないし、言いつらいことかと思ったけれどあっさりと答

えてくれた。

「試したことあるよ。この街より広い、魔物しかない荒野と山で。その時も性欲が尽きなくて、ひたすらキミを思って1人精液をぶちまけてた」

「～～っ」

聞いておいてなんだけど返答に困ってしまう。エルレオは続ける。

「脳内でキミのHな姿を思い描いて、イチャついたり、お互い汁まみれになったり、大好きなキミとたくさん愛し合ったよ」

「っ！」

おまんこの中でおちんちんが脈打った。一瞬射精されたのかと思ったけど、気分を高めただけらしい。おちんちんがさらに固くなったような気がした。

「まあ妄想よりも本物の方が綺麗だし、現実でHする方が気持ちが良いね」

嘘みたいな状況のせいでこの手の台詞は胸に響かなくかった。

勃起っぱなしのおちんちんも私に欲情しているのか魔力切れだからなのか本当のところはわから

ない。

私のことを想って1人Hしてくれていたなら、お互いに……、つまり相思相愛ということになる。私はノーマルというか一般的な行為しか妄想していないけど……！

「ここが休憩室だよね」

「ち、違う……くない」

「今なら男性更衣室も入り放題だけど、覗く？」

「やめてっ！」

職員用の休憩室の隣を指差すエルレオの腕を下げさせる。男性更衣室なんて入りたくないし、中で寝ている人も可哀想。さすがに脱いでもスラックスまででその下も着替えている人はいないと思うけど、それでも私に見られるのは嫌だろうし。

全裸のままの私達が着替えるべきだ……。

「じゃあ入ろっか」

「っ！」

休憩室の扉を開いて中へ進む。10名程度の男女がテーブルやソファで気持ち良さそうに眠っていた。

「あっ……」

見知った顔に反応してしまう。一瞬遅れて後悔する。エルレオの顔を覗くと、優しく微笑みつつ私を見る目はいたずらっ子のようにキラキラとさせていた。

「キミがお世話になっている先輩かな？ それとも仲良しのお友達かな？」

「～っ！」

進む足を止められなかった。真っ直ぐに私の同僚2人の下へ歩いていく。裸で、裸の私を担いで……。

「お初にお目にかかります。魔法使いのエルレオと申します。お会いできたこと大変嬉しく思います」

「もお……」

眠ったままの2人へ恭しく自己紹介をする。すると私の方を見て、紹介してほしいと訴えてきた。ここまで来たら紹介しないのも2人に失礼だし、早く離れるためだと言い聞かせて渋々2人のことを話す。

「机に突っ伏している紫色の長髪の子がシェルル。魔法大臣の姪。ギルドでは商人からの依頼を精査してる。そしてシェルルにもたれている赤い短髪の子

がアイナ。両親もギルド職員。アイナは採取とか調査とか低難度のギルドクエスト関連の仕事をしてる。2人共優しくて気配り上手で……、とっても大事な友達」

「そっか、なるほど……」

国中あちこち馬車移動している私にとって2人は、顔を見るだけで気持ちが休まる数少ない相手だ。配属が定まっていない新人の頃から仕事の愚痴を言い合ったり、貴族や王族の方達の色恋話に花を咲かせたり、ずっと親しくしてくれた。

大切な相手だからこそエルレオとの関係はきちんと説明したいし、こうしておちんちんを挿入されている姿を向けるなんてしたくなかった。

すると、ようやく想いを汲んでくれたのか——、「んんっ……！」

おまんこからおちんちんを抜き取ってゆっくり下ろしてくれる。精液の混ざった愛液が太腿を伝って落ちていく。逆流する不思議な感覚は比喻し難く、自分でもいやらしく感じた。

違和感のあるおまんこにもテカリとしたおちん

ちんにも気にしていないふりをして、エルレオが再び挨拶するのを端で聞く。

「私達は幼馴染みで、私の出生の実情によって姉弟のように育てられました。今では姉弟の関係を越えて大切に想っています。離れ離れになる際は身が割かれるような思いをし、とても辛かった。たからこそ、今後一生、片時も離れたくないという思いが強いです」

「エ、エルレオ……、大袈裟過ぎるって……」

聞いている方が恥ずかしくなる。ましてや自分のことなら尚更……。

しかしエルレオは続ける。

「私が魔術学院入学のために旅立ってから今日に至るまで10年。会うこともできず不甲斐なく思っております。一緒に過ごした時間よりも離れていた時間の方が長い。しかし今後は、10年を短く思うほど永い時間を2人で歩んで行きたいと思います」

胸を張って言い切られる。友達への宣言にしては気合が入りすぎている。変わらず2人の耳には届かないが、私には刺さってしまった。

きっとエルレオは、私に向かって話しているのだ。私に、今後10年以上のお付き合いをする、その抱負として……。

「そういう大事なことは、私に直接言ってほしいよ……」

「キミにも誰に向けても、何回でも言えるから。キミを愛してるって」

「～～っ！」

体が沸騰しそうなほど熱くなる。

今後、起きている2人にまた同じことを言われるのかと思うと、気恥ずかしくてそわそわした。

顔に手を当て動揺を抑える。

少しして、隣に並ぶエルレオに、遠い方の肩に手を置かれてそっと抱き寄せられた。

私も拒むことなく胸に入る。

「またキミの中に挿入りたい。キミを深く感じたい」

「もう……、台無し……！」

せっかく改めてエルレオを尊敬したところなのに……。頭の中ではHなことしか考えてないかもと思ってしまう。

ただ、雰囲気や気持ち的な意味でHをする事自体には流されても良いと思えた。

「ちゃんと外でしょ」

押し当ててくる男根に手を当てておあずけする。

外なら良いというわけではないけれど、さすがにここでは……。

しかしエルレオは違う意味で受け取ったらしく

――

「わかった。外に出せば良いんだね」

「えっ！ いや！ そうじゃなくてっ！ 待って……！ しかも後ろからって……、んんんっ！」

背中に回られ、私の手をテーブルに抑えられる。お尻におちんちんを押し当てられてそのまま抵抗できず、再びおまんこへの進入を許してしまう。

1度目よりもすんなりと挿入った。

腰を抑えられるようにして、ぐちゅっと鈍い水音と共に一気に奥まで突かれる。

「んっ……、また……。あっ……」

膣内と肉棒が互いに愛液と精液でぬめりとして、いるおかげで滑りやすくなっていて、後ろから挿入

れられたせいか抱き合う体勢よりも深く奥へ届いているような気がした。

「この体勢だとキミの顔が見れないね……。こっちを向いて、感じている顔を見せて」

身体を支える手に力を入れながら、私は首を横に振る。声を我慢しているところ見られたくなかった。

エルレオの腰の動きが激しくなる。おまんこを突く度に高く大きな音が響いた。

「あぁっ……！」

一瞬おちんちんが膣内で引っ掛かって、そのあまりに気持ち良い刺激に思わず部屋全体に声を響かせてしまう。

慌てて口を手で抑えた。

周りや、友達2人を見て寝ていることを確認する。しかし目の前に人がいることを再確認した形になって、恥辱感と罪悪感が増した。

アイナとシェルルの前で、裸で、無理矢理おちんちんを挿入されて、抵抗しようとしていたのに感じてしまう。

「ん……！ あ……、くっ……！」

エルレオは方針転換し、激しく突くのをやめて、私が先ほど声を漏らした弱点部分を探る。

片手が股に近づいてきた。繋がっているところを撫で、その上の突起したクリトリスを擦って私の性感を刺激する。時折胸を揉まれたりしてひたすら感じさせられた。

「あふっ……。あっ……。んっ！ んっ！ また、激しっ！」

エルレオの腰の動きが段々と速くなる。おちんちんが膨らんでいるのを中で感じ取り、射精が近いのだと悟った。

「約束通り……。外に出してあげるね。どこに出す？ お尻？ お胸にかける？」

「どこも……。あっ……。ダメっ……。あんっ」

奥まで刺激され、私もイキそうになって、思考が停止しかけていた。

何も考えられなくなりそうだった。

エルレオの溢れる膨大な精液量と、自身が絶頂した際にも愛液が零れてしまうことなどの対策が思いつかない。間違いなく床を濡らすし、最悪の場合、

アイナとシェルルの服や髪を汚してしまうかもしれない。それだけは絶対に避けなければならなかった。

唯一思いついた方法は、自分の身体で受け止めることだった。

「あっ……。っかに……。して……」

「えっ……。？ もう1回言って？」

「中に出してっ！ んんっ！ ああん……。！」

懇願するように絶叫する。

エルレオはそれを見計らったかのように射精され、私もほとんど同時に絶頂した。

腰を掴まれ、奥の奥に精子を流し込まれた。

どくどくと脈打ちながら一滴も漏らさんと絞り出される。

全身が痺れ、快感に溺れそうになりながら、身体はその精子をしっかりと受け止めていた。

内腿を伝う雫がどちらなのかわからない。

私は誰にも顔を見せないようにとテーブルに伏せて、感じた証拠を痙攣だけに留めた。寝ている2人の顔も見れない。

「2人もきっと……、夢の中でオレ達を祝福してくれてるよ」

息の上がった声で気持ちよさそうに呟くエルレオに、私は肯定も否定もしなかった。



手を繋いで石畳の坂を下りていく。

1枚ずつブランケットを羽織り、私は新しいシューズをもらって、エルレオは裸でおちんちんを立てたまま眠った街を歩く。

「割と時間がかかる方だと思っていたから、こんなに短い間隔で何度も射精できるなんて思ってなかったよ」

言われて自然とエルレオの一物に目が行っていたことに気づいてすぐに視線を逸らした。

本で読んだ知識では、男性は一度射精すれば勃起が回復するまでにも、射精するにもさらに時間がかかるという。1度目でも勃起してから射精するまでの時間は個人差があるというし、無知な私でも2度目以降の射精でも精液の量が増やすエルレオがおかしいというのはわかる。

友達のアイナは付き合っていた男性が早漏すぎて相性最悪だったからという理由で別れたというし、シェルルの付き合う寸前だった男性が勃起するのに時間がかかったということで縁を切ったという。

エルレオ以外の経験がなく、そもそも他の男性とそういう関係になるなんて想像もしていない私には相性を判断したり比較したりするのは難しかった。

ただ一つ言えるのは、場所を選ばなかったりちょっと無理矢理になったりする以外、特に身体の相性には不満がないということだった。

「それ、痛くないの……？」

硬く膨らみ、赤く晴れ上がったおちんちんにはど

うしても心配してしまう。

「痛くないよ。敏感になったり膨らみ過ぎて痛い時もあるけど基本的には正常だから。まあキミを前にして勃起できるのは最高の気分かな。オレが興奮するのはキミだけ。キミが特別なんだ」

「っ！」

「キミじゃなきゃ抜けないくらいオレの心も体もダメになってる。女性らしくて色っぽくて、愛嬌があってそれでいて初心で、愛し合うことを受け入れてくれる。そんなキミが好きだ」

「もう……。わかったって……。そう何度も言わなくても……」

似た台詞を何度も言われて呆れつつ、嬉しさをごまかせずに顔を赤くしてしまう。

初心だなんて言われて照れ臭かったけど、よく見ているんだなと感心してしまった。

立場的にも容姿的にもどんな女性でも墮とせそうなのに、私のことだけを見てくれてるなんて……。自信はないけれど、私はエルレオを信じて一緒に歩んでいくしかなかった。

「嫉妬されても知らないよ……？」

「ああ。キミに言い寄る男から一生守り続けるし、嫉妬されないくらい男を磨いていくよ」

「いや、そうじゃなくて……。もういいや……」

他の女性からという意味だったけどエルレオはあまり理解していなさそうだった。まあ、私自身も国中の女性から嫉妬されるわけだし、それから守ってくれるならずっとそばにいた方が安全かもしれない。

それに……。

「オレは、そのつもりでいるよ」

「……………。うん……」

おへそにやや下に手を当てて、たっぷり込められた赤ちゃんの素を感じ取る。

「男の子でも女の子でも、キミと一緒に愛していく……」

握っている手が力強くなる。

これだけ何度もたくさんの精液を注がれたら子どもを授かっているのも不思議ではない。突飛だし、準備も心づもりもしていなかったけど、もしそうな

れば大人として責任を果たすしかないのだ。

「嘘だったら2度とお話ししてあげないからね」

「ああ。一生かけて嘘じゃないと証明するよ」

こんな大事な話をこんな格好で……。裸で外を歩くことに慣れつつある自分が怖くなってきた。

なんとなく隣を見ると、同じタイミングで振り向いたエルレオと目が合った。ゆっくりと顔が近づいてきて唇が触れ合う。少し当たっただけですぐに離れたのが逆にもどかしくなった。

舌を絡めたり舐め合ったりはなく、微笑むだけで済ませたエルレオとは対照的に、私の方が求めてしまっている。

足を止めてキスして、胸もアソコも全身舐めて感じさせてほしいとまで考えてしまったのに……。冷静そうなエルレオの横顔を見て私は一層恥ずかしくなった。

「着いたよ」

「！」

言われて、悶々とした感情を払って我に戻る。

辿り着いたのは王立魔法学校。エルレオの母校だ。

「エルレオはここで学んで、心も体も大きくなっていったんだね」

「うん。懐かし……くはないかな。目立つし」

王都でも一際目立つ大きな建物だが、中には拡張魔法が施されていてさらに広がっていた。その上、別校舎も多く、全容を把握している者は内部でも少ないと言われている。

「こ、ここで何するの……？」

「そうだよ。ナニするんだよ」

「またそれ……」

呆れてため息をつくエルレオの胸に抱き寄せられた。

「大丈夫。学生の前ではやらないって。教師の前でもあんまりやりたくないしね。まあ祭りの日はほとんど出払ってると思うけど」

「だったらどうして」

人に見られたいわけじゃないけど、人前ですするという目的以外でここに来たとは思えない。

「とりあえず、中に入ろうか」

足も抱えられ、浮遊魔法で4階の開いている窓ま

で飛んで中に入る。

窓が開いているということは人がいるということだが、着いたのは廊下で、幸い人はいなかった。

「エルレオ。下ろしてくれていいよ……？」

「ん？ 嫌だったら下りていいよ」

「~~~~っ！」

お姫様抱っこをされたまま進まれる。恥ずかしいけど悪い気分でもないというどっちつかずな状態で、下りるかどうかわず私そのまま抱えられる方であることにした。

ブランケットで胸を隠す。今さらだけど。

ショーツを履いてなくて秘部が丸見えだったなら下りていたかもしれない。

「エルレオはここに来るの、どれくらいぶりなの？」

「1年ぶりくらいかな。卒業してからも書庫は使ってたし、結界魔法の研究のために教授と相談してたかな」

熱心に勉強する姿が目につかぶ。卒業してからも勤勉で努力家という評判を耳にしていたけど、まさか動機がこんなことのためだとは誰も思わないだ

ろう。知られたら学校から追い出されそうだ。

「ここから先は魔法空間だからね。拡張魔法で空間が歪んでるから迷子にならないようにね。迷うと外に出た後も迷うから」

「う、うん……」

罨が仕掛けられていたり、魔物が棲んでいたりするわけではない。単純に広い造りになっていて、敷地内のどこから入ってどこへ出るのかある程度把握しておかないと自分がどこにいるのかわからなくなって混乱するのだ。

狭い廊下の端にある小さな扉を開く。

教室の扉かと思いきや、視界の広い魔道書室になっていた。見上げるほど天井が高い。4階にいたかと思えば吹き抜けの下を覗くと5階にいることがわかる。確かに現在地がわからなくなりそうだ。

1番下の階にテーブルが並び、書棚は階を突き抜けて聳え立っている。最低でも本を取れるレベルの浮遊魔法がなければ読むことが出来ない。まるで閲覧制限をかけているみたいだ。

「厳しいね……。篩にかけているというか、試して

いるというか……」

「魔導書なんて赤ん坊の絵本みたいに気楽に読んでほしいのにね」

「絵本はどうだろう……」

吹き抜けから魔法で飛んで下りてテーブルに向かう。

そこには本を齧る様に眠っている子ども達が何人かいた。祭りの日にも魔法の勉強に励むなんて凄いなと思う。夢があったり、なりたい職業があったりするのだろうか。

「もしかしたらエルレオに憧れているのかもね」

「えー……。だとしても迷惑かな。せっかく普段できないところで、声も張れない静かで厳かな場所でSEXしようと思ったのに」

「最低……」

眠っている子達を横目に奥の扉へ向かう。

さすがのエルレオも学生の前でのHは避けるという倫理観の下、いやらしいことは何もしてこなかった。

いたずらで何かをされるかもと不安になったけ

ど杞憂だった。

ふと目の端に、隣り合って座る男女が入ってくる。椅子や書き物の位置的におそらく交際中なのだろう。

この学院の生徒の多くが親元を離れ、自立した自由な寮生活を送る。教師も保護者となるわけではない。若くとも問題を起こさなければ何事も干渉される事がないという。何を学ぶかも、誰と恋愛するかも自由だ……。

親が相手を決めるような高位の家柄でなければ、学院でパートナーを見つけて在学中に婚約し、早ければ卒業と同時に結婚することもあるという。

若いうちに一生を過ごそうと思える相手と出会えるのは素敵だなと思う。

若い男女の恋愛は感情的で移ろいやすい。もしかしたらエルレオにも、一時的にはああいった青春もあったかもしれない。

この場所にずっと通っていたエルレオは同い年くらいの男女が手を触れあったり肩を寄せ合ったりしているのを何度も間近で見てきたはず……。た

った 1 日でも目移りしないでほしいというのは私の心狭い我が儘だ。

私にもっとたくさんの魔力があれば、エルレオの隣に座れたかもしれない。

学生時代のエルレオを知れないのは当然とはいえ少し寂しかった。

「エルレオは……、ああいうのを見て羨ましいと思わなかったの？」

どうしようもなく聞きたくなって、衝動を抑えきれずに口に出してしまう。

扉の前に着いたエルレオの足が止まる。

「まーた、自信なくしちゃったの？」

「で、でも……！」

一度くらいなら、いや、何人かと一夜だけの関係というのがあってもおかしくなかった。それを聞いてどうこうということはないけれど聞かずにはいられなかった。

「勃たなかったんだって……」

「えっ？ ……。えっ……？」

予想外の回答に言葉を失う。

「キミ以外の女の子じゃ勃起しなかったんだよ。仕方がないというか、女の子に失礼な息子だよ。全く……」

ショーツ越しのお尻に固いおちんちんが当たる。先端が少し濡れているような気がした。

「今まで言い寄ってくる女の子はたくさんいたし、目の前で急に脱ぎ始めたり媚薬を飲ませようとしてきたりする子もいた。その度に思い人がいるって断ったけど、それ以前に勃起しなかったんだ」

「心の病気ってこと？」

「いや、部屋に帰ってキミのことを想うとすぐに勃起するんだ。他の女の子じゃダメ。キミのことだけを考えないと射精しない。毎日キミのことを想ってオナニーしていたよ」

「毎日……」

はにかむ笑顔とは対照的に私は引いてしまう。

勃起しないのは毎日 1 人でしていたせいじゃないかと思ったけど、愛が少し重くて疲れてきてしまった。

「まあ、いいか。エルレオが良いなら……」

私で勃起するならと言いかけてさすがに止めた。
「ところで今はどこに行こうとしてるの？」

エルレオは扉を開けて再び歩き始める。

目的地はHをする場所なのだろうけど、それが具体的にどこなのかは知らされていない。あてもなく彷徨っているようにも見えなかった。

「医務室だよ」

「医務室！？」

教室や講堂なのかと思っていただけで予想が外れる。

医務室であればベッドがあるし、タオルや汚れを拭くものもある。今まで経験したどの場所よりも快適にSEXできる……。と思いかけて首を振る。ここは学院であって決して許されない場所という事実は変わりなかった。

自分の価値観もいよいよおかしくなっている。それにエルレオの今までの行動からして医務室で普通にSEXするとは思えなかった。物を取るだけの可能性もある。

「医務室ですの……？ その……、Hみたいなこ

と……」

「するよ。真っ白なベッドの上でたっぷり可愛がってあげる」

「っ！」

不敵な笑みを浮かべられ、されてきた快樂行為を身体が思い出して感じてしまう。

抱えられて運ばれているのに下りて逃げる事が出来なかった。逃げる気も起きない。心も体もすっかり受け入れてしまっている。

それに、今回は医務室に誰もいないという安心感があった。

「一緒にイク準備が出来ているって感じだね」

「ちっ……、違わないけど……。人がいない場所だからまだマシかなって……」

俯きながらも本音を零す。意地っ張りになっても、エルレオの暴走は止められない。なら素直になる方が互いのためな気がした。

「そっか。オレも懐かしさを感じるなら人がいない場所が良いかなって。それにベッドがないとキミのおまんこに挿入できないかもしれないから……」

「懐かしさ？ 挿入れられないってどういう……」

意味深なセリフに戸惑っているうちに医務室に着いた。中はギルドの医務室と変わらないような、カーテンで仕切られたベッド 3 つと医師用の机と薬品棚があるだけの殺風景な部屋。

特殊な道具があるのかと怪しんだけど特に何も変わった場所は見られなかった。

エルレオの腕から下ろされ、ベッドに寝かせられる。ベッドに細工や魔法陣はなさそうだった。

「エルレオ、さっき言ったのって……ええっ！！！」

エルレオの体が眩しい光に包まれ、みるみる小さくなっていく。少しして止まり、その体躯は 10 年前の記憶と変わらないような……、少し成長しただけの子どもの姿になった。

全身を見回し、最後に気になったところ一点を凝視してしまう。

「おちんちんが……大きいけど、小さくなってる……」

「そこなんだね……」

あまりに突然な体の変化に思わず口を滑らせて

しまった。

「いや、違くて……。それもエルレオが作った魔法なの？ 若返り？ 世紀の大発明なんじゃ……」

「ただの変身魔法だよ。大体 7～8 年前の自分に戻っただけ。けど、学生時代のオレと SEX するみたいで興奮するでしょ……？」

理屈はわかった。身体を大きくしたり小さくしたりする変身魔法。その応用で記憶を頼りに過去の自分に変身したと……。十分凄い気がするけど、エルレオなら自分以外の人や魔物、獣にまで変身できるのだろう。

さすがは大魔法使い……。

とはいえ問題がある。

「中身は大人のエルレオでも、子どもとはHできないよ」

10 年前もそういったことを考えていなかった。

プロポーズをされた後、私 1 人でHをしていた時も少し大人になったエルレオを想像して浸っていた。

学生時代を知りたいとは思ったのは事実だけど、

こういう意味では……。

「倫理的に良くな——」

「愛し合っているから問題ないよ」

ダメな理由を口にする私をエルレオは無理矢理押し倒してくる。

子どもの姿なのに力では敵わなかった。

股の間に入られて、ショーツの中に手を入れられる。

「ダメっ……！ あっ……、指い……！」

あっさりと指の侵入を許してしまう。ぬめりとしたおまんこの中の愛液を掻き混ぜられる。

ブランケットがはだけ落ち、小さな手で胸を揉まれた。

「くっ……。んっ……」

「さっきよりも随分と感じてるね。何度もイったからかな。それともやっぱり、オレが昔の姿になったからかな？」

いじわるに胸とアソコを責めてくる。

子どものエルレオとHしてはいけない。感じてはならない。そう思うほど、敏感になってしまった。

「いい加減に……、しな……、さい……。んんっ！
あっ！」

胸を揉む手を払えたかと思えば、今度は乳首を舐められてしまう。童顔になったエルレオは、容姿年齢にそぐわない舌遣いで私を的確に感じさせた。

小さい身体に翻弄される。相手はエルレオなのに、子どものいたずらに負ける屈辱と感じさせられる敗北感が押し寄せた。

「いやっ！ 待って！ それじゃ、また……！」

両手がショーツの端に伸びる。

するりと太腿を通され、足を上げた仰向けの状態でショーツを脱がされた。

布で隠していた秘部が露になる。触られていたとはいえ、守る物がない無防備さが一層焦りを生む。

「見ないでっ！ 恥ずかしいっ！」

仰向けのまま足を開かれる。手をどかされておまんこを丸見えにさせられた。

「ダメダメ。良く見せてね。ここは明るいから全部見えるよ。綺麗な筋も、開いたり閉じたりするH穴も。キュートなお尻の穴もね」

「いやあ……！」

座った体勢や後ろからだった時と違い、ベッドに寝転がされて脚を開かれている今の状況。おまんこの奥まで観察されるのは、エルレオの容姿に関わらず恥ずかしかった。

「あんっ……！ 吸ったり……、舐めたり……、ダメ……！」

見るだけじゃ済まず、おまんこにキスされ舌を入れられる。

「とっても美味しいよ。力が漲ってくる。どんなポーションよりも元気になる気がするよ」

「バカあ……。んっ……！ んっ！」

びちゃびちゃと舌を抜き差しされ、くちゆくちゆと唾液と愛液を掻き混ぜられる。小さな舌でこれまで舐められていなかったところも舐められ、新しい刺激が押し寄せる。おまんこの中も外もぐちょぐちょになっていた。

「よしっ……。十分濡れたかな。小さい身体でキミを感じさせられるか心配だったけど、大丈夫そうだね……。そろそろ挿入れるよ……」

「はあ……。はあ……。んっ……」

おちんちんの先端がすでにおまんこに挿入っていた。

やめさせないと……。そう思っている体も、心のうちの半分もすっかりエルレオを求めてしまっていた。

小さい身体で一生懸命に感じさせようとしてくれたそのご褒美。という口実で、気づけば体の力を抜いてしまっていた。

「だ、だめえ……。んんっ！！」

理性だけは保ってエルレオを拒む。しかし口で言う割に身体はあっさり受け入れてしまった。

勢いよく肉棒が飛び入ってくる。優しさを忘れた暴れん坊のよう。

「好きだ！ 愛してるっ！」

スイッチが入ったのかすっかり暴走してしまっていた。

「エルレオ……。ちょっと……。あっ！ 落ちていてっ！ あんっ！」

小さいおちんちんがちょうど気持ち良いところ

に当たって、否応なく感じさせられた。狭い部屋に、ぱちゅぱちゅと高い音が鳴る。

感じてしまう。気持ち良い。

子どものおちんちんにイカせられそうになっていた。

「オレ……、もう……。出すよ！」

「イク……！ イっちゃう……！ んん~~~~っ！」

最後に奥を突かれ、耐え切れずに達してしまう。エルレオからも熱い精子を注がれ、その幼くなった顔を見れなくなった。

「んっ！」

おちんちんを抜かれる。

「あっ……」

中から精子が零れ出てくる。それほど出されたのだと身に染みて実感する。

身体に力が入らず、足が閉じれなくなった。

「んっ！」

指で、外へ溢れ出た精子をおまんこの中に戻される。

いつの間にか変身が解けて大人の姿になっていた。

「大人ちんぽと子どもちんぽ、どっちが気持ち良かった？」

「そんなの知らない……！」

そっぽを向いて拗ねたふりをすると――、

「じゃあ、試しみよっか……」

大きくなった大きいおちんちんが、まだイッたばかりのおまんこに押し入ってきた……。

第3話

人間が1日に絶頂できる限界数なんて考えたこともなかった。自分が男性からこんなにイカせられるなんて……。

大人になった今になって子どもエルレオにまで責められるなんて思ってもみなかった。

Hによる疲労が中々癒えず、真っ直ぐに歩くことが難しくなっている。

学院の中庭の歩道脇には鮮やかな花々が咲き誇っているのに、それを楽しむ余裕もなかった。

ショーツを剥がれたままブランケットも羽織らず、エルレオの腕を掴んでもたれるようにして歩く。

「大丈夫？ 抱いて運んであげるよ」

「いい……」

親切な提案を断る。

抱えてもらった方が早く目的地に着くだろうけど、それでも結局、早くHすることになるだけな気がした。

出された精液がまだお腹の中に残っていて、今は

何も挿入されていないのに異物感が消えなかった。

次に着く場所でもHするのはわかっている。逃げない代わりに、快楽に溺れないためのささやかな抵抗だった。

「次はこの上でするよ」

「上……？ えっ！」

巨大な筒状の建物。学院で最も高く、屋上が展望台になっていて、学院を舞台に描かれる恋物語では必ず登場するロマンスの聖地だった。

「これを上るの……？」

とはいえ高すぎる。地上から60階くらいはありそうだ。見上げ続けると首が痛くなる。

「さすがに飛んで行くよ」

「やっぱり……」

結局、抱きかかえることになった。頂上は冷えるからと体温調整の魔法とブランケットをかけられる。服は返してくれなかった。

赤子のように軽く持ち上げられ、エルレオと共にゆっくりと地面から離れる。

速度を上げず、階段を上ると変わらない速さで

垂直に飛んだ。

囲っていた校舎の屋上、さらに先の街の建物が目に映る。視界が広くなり、視認できる建物が増えていった。かと思えば、次第に小さくなっていく。

太陽が西へ傾き始めている。

夕日に照らされた街は鮮やかで、大切な人と見るには最高の景色だった。

まだ展望台に届いていないのに魅せられる。学生が羨ましいくらい素敵な光景だった。

「綺麗だね……」

「キミの方が綺麗だよ……」

「……………」

嬉しいけれど、今は紅い街の美しさを一緒に見とれたい気分だった。

「そっか、エルレオは見慣れてるのか」

外からでも目立つ有名スポット。長年通っていた元生徒なら行く機会もあっただろう。

「そうじゃないけど、今は景色よりキミを愛でたい」

「んっ！」

抱えた腕を折り返して私の体を撫でてくる。

「危ないから……。こんなところで…、やめてっ」

地上から随分と離れている空中でくすぐられてバランスを崩しそうになる。

「ごめんね。キミが可愛いから、つい……。上に着いてから可愛がってあげるね」

「もう……！」

口ぶりも、いたずらっぽく笑う表情からも悪びれた様子は感じられなかった。

展望台でも医務室での変身魔法のように、何か悪巧みをしているに違いなかった。

「へ、変身魔法はもうダメだからね」

ダメと言って聞くかわからないけど、微かな希望を込めて釘を刺しておく。

「そっか、大人ちんぽの方が良かったんだ」

「なっ……！　そういうことじゃなくって……！」

医務室で大小のおちんちんを交互に挿入れられたのを思い出す。両方に何度もイカせられ、どちらが好きかなんて大ききさでは選べなかった。

「じゃあ昔の姿の方が好き？」

「っ……！ だから、そうじゃなくて……。どっちもエルレオだから一緒だよ……」

ブランケットに隠れるように身体を丸めて背中を向ける。

姿が変わっても中身は変わらない気がした。

どちらとも幼い子どもという意味でもあるけど、例えどちらか一方と身体の相性が悪かったとしても、一方を他人のように扱うことはしない。

私にとってエルレオはエルレオだ。

「そっか……」

ブランケット越しに少し嬉しそうな声が聞こえた。

「オレはオレだもんね。キミならそう言ってくれると信じてたよ」

安心したような、それでいて何か意味ありげな台詞についつい勘ぐってしまう。気づけば頂上まで辿り着いていて目的地に降りた。

吹く風が涼しくて心地良い。魔法をかけてもらっていないければ凍えていただろうけど。

祭りを眺められるとあって多くの生徒がいるか

と思いきや、展望台には誰もいなかった。

エルレオの胸から下ろしてもらい、その疑問を尋ねる。

「エルレオが人払いしたの……？」

「してないよ。気配察知で人がいないのは知ってたけど……。まあ、ここには貴族の子息がよく来るから以外と人が寄らないし、空いてることが多いよ」

身分を気にして一般の生徒が寄り付かなくなってしまったのか。身の安全のために貴族と関わるのを避けたい気持ちはわかる。

「そもそも高過ぎて 1 度見に来たらもういいやつてなるし」

「切ない……」

ロマンスの聖地だから人が集まっているというのは幻想で、恋物語そのものへの夢が壊れてしまいそうだった。

「そういえば、ここへ男女一緒に来た恋人達はみな破局するっていう噂があったな」

「えっ？ ええー！」

そういう逆おまじないが学院にもあるかと驚い

たし、恋物語の舞台がそんな扱いを受けているのは皮肉すぎるし、何より私達は……。

「き、来ちゃったよ？ 私達……！」

思わず慌ててしまう。ただの噂であっても不安になる。

「あれだよ。少し前に、ここで王太子から盛大にフラレたご令嬢がやっかみで吹聴しただけだから誰も信じてないって。大臣の多くも、確かギルマスも夫婦でここへ来てずっと仲良くされてるよ」

「そ、それなら……」

諭されて少し気が楽になる。言われてみれば物語には実話もあるっていうし、悪い噂が根強く広まっている場所をフィナーレの舞台には選ばないはず……。

「オレ達は大丈夫。噂ごときで仲を割かれることはないから。それに……、新しいジnkスを作るのも良いね」

「あ、新しいジnkス……？」

肩を手繰り寄せられ、正面で向かい合う。夕日に照らされるエルレオにときめき、心臓の鼓動を肌に

感じた。

エルレオの大きなまばたきで察する。目を閉じて唇を待った。

「ん……。……。はあ……」

濃厚な口づけに気分が高揚してしまう。

「ここでキスしたらどうなるの……？」

新しいジnkス、これから広まっていくかもしれない噂の種を尋ねる。

「ん？　ここで裸でHした男女は一生結ばれるってことだよ」

「やっ……。ん……。んん……。んん……！」

再びキスされ、温かい手が胸と股に触れた。

進入される舌を押し返すと、隙間を縫うようにさらに深く入り込まれた。胸を揉む手は強弱をつけ、股をまさぐる手はいやらしく局部に触れたは離れるを繰り返して焦らすように周りを撫でる。

「あっ……。あむ……。んっ……」

濡れてきた……。身体は期待してしまっている。

いち早く気付いたエルレオは水の流れに逆らうように、上流に向かって恥部を撫でて、さらに潤わ

せる。そして剥かれたままだったクリトリスを撫でて着実に私の気分を高めていった。

「はあ……、濡れやすくなったね。気持ち良いんだ」

「んっ……！ ああ……！」

指を挿入され、吐息交じりの声が漏れた。今までよりも感じてしまっている。何度味わってもこの、指入れされる瞬間の異物感には慣れなかった。さらに固くて太いものなら一層……。

「くっ……！ んんっ！ やあ……！ あん……！ んん……！」

キスもままならなくなっていた。羽織っていたブランケットがするりと落ちる。

中で小刻みに震えていた指が激しくなっていく。愛液を掻き混ぜられ、くちゆくちゆと音が響いた。

激しさが増し、入れる指を深くしたり浅くしたりと出し入れされ、全身が浮くようなあの感覚が近づく。

「もうすぐだね。王都で、いや、国で最も高い場所で……。キミの感じた声を聞かせて」

腰に力が入らずエルレオの体にしがみつく。

湧き上がる感覚を抑えられなかった。

「だめ……。だめっ！ あっ……。あっ！ んんん〜〜〜っ！」

全身に電流が走ったように痺れ、足先まで痙攣する。

気持ち良く絶頂させられた。Hな飛沫が床を濡らす。

息切れしながらエルレオにもたれかかる。こうなると次は私がエルレオを気持ち良くする番だ。息を整えつつ、言われる前にとおちんちんに手を伸ばそうとするが――

「待って……。エルレオっ！」

おまんこへ責めは止まず、引き続き激しく指ストロークされる。

「もう、イっちゃったから……。いったってば……。んんっ！」

聞く耳を持たず責め続け、エルレオは飢えた獣のように乳首を舐める。

絶頂して感度が増した敏感なところを刺激され、抵抗する力を出せず、感じる事しかできなかった。

「あっ……！ はっ……！ んっ！ また、イクっ……！」

ぐちょぐちょと、いった時の雫か今湧き出たお露かわからない愛液を掻き混ぜられる。出し入れされる指が膣内しなるように動いている感じた。

「んんっ！ あんっ！ んんっ！！！」

絶頂して痙攣し、全身が麻痺する。腰がびくんと跳ねて飛沫が溢れた。

腰が碎けて膝が折れる。エルレオに支えられてなければ地面で横になるほど力が抜けてしまっていた。

「はあ……。はあ……。もう、ばかあ……」

全身に疲労感が押し寄せる。短い時間で2度もイカされたショックも大きかった。エルレオの言う通り、感じやすい身体にされてしまったのかもしれない……。

「もう無理……。だから、休憩しよう……」

イカされてばかりで身体の疲れが一向に抜けなかった。

エルレオの絶倫を相手するのは私じゃ……。

ふと他の誰か、別の女性とエルレオが結ばれる画を想像してしまう。胸がズキリと痛んだ。

「少し横になろうか」

どこからともなく、魔法で大きなベッドを取り出される。綺麗なシーツ、2人を包んでも余る布団。1人用じゃなく、人と一緒に寝る事を想定して用意していたのだろう。きっと、私とこういう機会を待ち望みながら……。

抱えられてベッドで仰向けに寝かされる。ベッドは医務室のものよりも柔らかかった。

タオルで濡れているアソコを拭こう近づいてきた腕を抑える。

「ん？ 自分で拭く？」

「まだ、いい……」

背中ではベッドに付けて、足だけ姿勢を変える。

エルレオの絶倫に耐える自信はないけど、他の女の子とHされるのは嫌だった。これだけのことをされているのに嫌いにはなれない。私が独占したい。エルレオの、最初で最後の女性になりたかった。

はしたない自覚はある。すごく恥ずかしい。こん

な姿、誰にも見せられない。けど、エルレオには全てを曝け出さないといけない気がした。

足を開いて手を股に寄せ、愛液の溜まったおまんこを大好きな相手に見せつけた。

「優しく、シテね……」

「！！ そんなことされたら……」

「んんっ！ ああん……！」

身体が密着する。

おちんちんがぬるりと入ってきた。これまでの狂暴なケモノのような激しさはなく、ゆっくりと強く、深くおちんちんを押し込まれる。

「お腹、くるし……」

「ごめん……。嬉しすぎて……」

エルレオもどこか初々しい様子で、今までとは全く違った雰囲気漂っていた。

「んっ！ っあ！！ んんっ！」

初めてした時から激しいSEXばかりだった気がするから、こうしたスローHは新鮮で、おまんこの中を動くおちんちんをより強く実感した。慣れないリズムに身体も疼いてしまう。

私が求めていなくても身体を拭かれた後にベッドで添い寝し、覆い被さるか、寝ころんだままかで挿入されていたと思う。しかし、羞恥心に耐えて素直にエルレオを求めたおかげでこれまでと違った気持ち良さを得ることが出来た。

ゆっくり、ねっとりとした腰使いに身体が温まって、気持ちも高まった。

「キミから求めてくれるなんて……。それだけで射精しちゃいそうだよ」

「き、嫌いになる？ んっ……」

「まさか。最高だよ」

「んっ……。んんっ！」

気持ち良さか、軽蔑されなかった安心感からか思わずうっとりする。

大人な小説のヒロインみたいに上手なおねだりはできない。それでも求めて良かったと思う。

「んっ、んっ、んっ……！」

次第に出し入れのテンポが早くなる。

腰を振るエルレオの表情が強張っていた。

「そろそろ、余裕ない……」

「いいよ。出して……。んっ！」

「ごめん……。！」

「んんっ！」

たっぷりと精液を注がれる。うねるように一滴一滴絞り出された。

Hで初めてエルレオが先にイった気がする。私も十分、気持ち良くなって感じていたのにイク気配はまだなかった。

「ごめん、先に出しちゃった……」

「わ、私は平気だよ……」

申し訳なさそうに苦い表情を見せてきた。

「んんっ……」

おちんちんを抜かれ、出された精子が垂れ出てくる。私がイっていないからか前よりも白かった。

「私はエルレオが気持ちよくなってくれて嬉しいよ」

「ああ。めちゃくちゃ気持ち良かった。キミから求めてくれたのが嬉しすぎてテンション上がっちゃった。本当はイかせてあげたかったけど、先に出しちゃったよ」

悔しそう、でも満足そうでもある笑みを浮かべる。

Hひとつでも私のことを深く考えくれているのが伝わってきた。

「けど、私がそうしてなくてもHはするつもりだったんでしょ？ 休憩なんて嘘ついて」

そもそも展望台に来たのもそれが目的だ。それに、ジंकス作りと言うなら SEX しないで降りるなんて考えられなかった。

「休憩はするつもりだったよ？ 指入れや SEX は休憩して、ちんぽを舐めてもらおうと思って」

「！！ ……………。はぁ……」

心配しなくても、私以外の女性なら呆れて離れていくような気がした。

そんなエルレオについていこうとしている私も、人のことは言えないのかもしれないけれど……。

「あ、舐めてくれるの？」

私は何も言わず濡れたおちんちんを両手で握った。

射精が早かったとはいえ、やはり一向に柔らかくなる気配はなく、またすぐに再開できそうなほどカ

チカチにになっていた。

いったばかりのおちんちんを少し強めにシゴく。エルレオは驚きつつも嬉しそうな顔で私の頭を撫でていた。

「エルレオ、座って……」

舐めようと口を近づけようとするが、お互いにベッドの上にはいたままではやりづらかった。端に座ってもらい、私が下りて舐めることに。

唾液を垂らして先端から肉棒に沿って舐め下す。一方向に。アクセントとして啞え混んで、顎が辛くなる前に最初の手順に戻る。その繰り返し。

「吹っ切れた？ 積極的だし、とにかく上手になったね」

「慣れただけ……」

正しいやり方なのか見たことが無いしわからない。エルレオの感じ方を見てなんとなくでやっているだけだった。

それに熱いおちんちんを口で直接感じていれば私の気分も高まってくる。おかげで本で読んだ時のイメージが思い浮かんできて自信が持てた。

「ん……。あむ……。んゆ……」

人のおちんちんを舐めているだけで、エルレオの温かみを感じているだけでドキドキしてきて、私の体も熱くなってしまっていた。このおちんちんでナニをされていたのかを思い出して、段々と気持ちが高まっていき、また求めてしまいそうになる。

「んっ……。っ……」

「ん？ あっ……」

私の頭を撫でながら幸せそうな顔をしていたエルレオが、今度はいたずらっ子のような笑みを浮かべる。

「ち、ちが……！」

私が自分のアソコに伸ばそうとしていた手を見られたのだ。触れる寸前。ほとんど無意識だった。自分が何をしようとしていたのか気づき、自分でも恥ずかしくなってしまう。

「あ、アソコが痒くて……！ 掻こうとして……」

「ふーん……」

苦しい言い訳をニヤニヤとしながら頷かれる。

「掻いてあげようか？」

「い、いや。平気！ 大丈夫……」

わざとらしく聞かれて戸惑いながらも必死に返す。本当は少し期待したなんて口が裂けても言えなかった。

「というか、そうだよ。オレしかイってないもんね。思いやりがなかった」

「あっ、えっ？ いや……」

察しよく何かを閃いたエルレオに、私は嫌な予感しかしなかった。

「ごめんね、気づかなくて。物足りなかったんだよね」

「そ、そうじゃなくて……！」

「けど、舐めてももらいたいから……。こうしよう」

指をパチンと鳴らす。すると私の背後にただならぬ気配を感じた。

「えっ！ ええっ！！」

顔も体格もエルレオそっくりな分身がそこに立っていた。裸で。おちんちんも勃ってしまっている。

「ただの肉の塊。魂の入っていないオレの人形だよ」

呼吸を感じられず、目も虚ろだった。かと思いき

や急に生が宿ったかのようにまばたきを始める。

突然動き出して、私の腰に腕を伸ばしてくる。弾いた手は人と変わらない温かみがあった。

「ちょっと！ えっ！ どういう……！？」

「オレの思い通りに動く人形。まだお披露目はしてない」

体温を感じられる人形なんて歴史上にも存在していないし、大魔法使いといえども偉業だとは思いますが今はそれどころではない。

「他の男がキミに触れるのは嫌だけどオレの分身なら良いかなって。それに一部の感覚も共有してるから、そいつと SEX するとオレも一緒に気持ち良くなれる」

「そ、そんなこと言ったって……！」

見た目がエルレオで分身だからって、Hまでするのは抵抗があった。

しかし、本体に肩を押さえつけられて、分身エルレオにお尻を掴まれる。

いきなり舌を入れられ、挿入の準備を始められる。恐怖心の方が勝っているはずなのに舐められる快

感には逆らえなかった。

「んっ！ あっ……！」

舌使いもエルレオそっくり。唾液も出ていて人形だなんて未だに信じられない。

「こっちを向いて……」

「や……、だめ……」

本体の方に首を向けられ、キスされる。エルレオの舌が不自然に動いていて、舌同士で絡め合う度に人形の舌も反応する。

「っはあ……」

「そろそろ挿入れよっか」

「あっ……」

上も下も、私の体から舌が離れる。

尖った固いものがおまんこに当てられる。私は怖くて、後ろを見れなかった。

「いくよ……」

「んんっ！ あっ……！ んっ！」

抵抗なく体が受け入れる。おまんこが濡れていたからだけでなく、味わったことのある肉棒と瓜二つものだったからだ。

「人形の扱いに慣れてなくて、ちょっとぎこちないけどごめんね」

「あっ……！ んっ……！ んっ！ んんっ！」

それは言われても私は十分感じてしまっていた。恐怖心や抵抗感はあるけど体がエルレオのものだと認識して許してしまっている。

「じゃあ、こっちも舐めてもらおうかな」

後ろから挿入されて必死なところに、おちんちんを差し出される。

その肉棒を払いたくなかったのはほんの一瞬だけで、気づけば自ら啜え混んでしまっていた。それが当たり前だったかのように。特異過ぎるシチュエーションに興奮してしまっていたのだ。

「偉いね……。挿入されながらも舐めてくれるなんて……。オレは2倍気持ち良くて、また射精しそうだよ」

2つのおちんちんが共に脈打つ。

人形の方も射精するのかと驚いたが、私の方もイキそうになっていて、どちらのおちんちんにも気を向けられなかった。

後ろと口元からの水音に否応なく興奮させられた。

人形の腰を振る速度が速くなる。

「一緒にイこうね」

「んっ！ んっ！ あっ……！」

「人形の方は種無しだから安心してね。お口と、おまんこ、同時に上手に飲み込めるかな？」

お尻も頭も固定されて逃げられない。イキそうになっていて、イキたくなってしまっていて自分がどうしたいのかわからなくなっていた。

「あっ……。らめっ……。あんっ！ っ～～～！！」

口とおまんこに射精されながら、私も絶頂してしまう。

痙攣のさ中、人形のおちんちんが抜かれる。人形のそれは下を向いていて、芯が抜けたように柔らかくなっていた。

小さくなくても子どもエルレオのおちんちんよりも大きかった。

驚きのあまり、口に含んだ精子をすべて飲み込ん

でした。



展望台を下りて夕日の落ちた街を手繋ぎ歩く。

次の目的地は教会ということだった。

「裸で行くようなところじゃないと思う」

「そんなことはないよ。宗教画では神も信者も裸だから」

「……………」

妙な屁理屈をこねられ反論をやめる。

画の中の神様や天使、信者達が裸でも現代の私達が片や裸、片やショーツ1枚で踏み入るのは違う気がする。

ましてやそこへナニをしに行くなんて…………。

そんなことを考えるうちに眠気がよぎった。

「はわあ……」

繋いでる方とは反対の手で欠伸する口を覆った。

「眠い？」

「うん……。今日1日で色々あったから……」

眠る時間にはまだ早いけれど体が疲れ切っていて、目を閉じると夢の世界へお出かけしそうになった。

色々あったと言っても幼馴染と再会してプロポーズをされたということ以外はほとんどHなことしかしていない。エルレオの思い出の場所に行ったのはともかく、私の友達にはまた起きている時に会いたいし、初Hも冷静になるともっと落ち着いた場所で……。

マイナス思考になってしまったのを、過ぎたことだと振り払った。

「教会に用事なら別の日でも良いんじゃない……」

「ううん。それだとHことできないし」

あくまでそれが目的なのだと、知っていながらも呆れてしまう。

「それにしても暗いね。灯りが点いてないとこんな

にも暗いんだ」

夜になると魔法灯が点けられるが自動ではないため、点ける者が眠っているなら暗いのは仕方がない。昼に点けられていなかったなら街道も建物の部屋も暗いままで当然だ。

つまり、これから私達が何もしていないところで新しい灯りが点いたら誰かが起きているということになる。なんだかゾツとする話だ。灯りが点かないか心配になって周りをキョロキョロしてしまう。「そんなに怯えなくても、本当にみんな寝てるから」「う、うん……」

さすがに不安な気持ちを汲んで諭してくれる。

しかし私の心配事は寝ている人にも向いていた。教会には間違いなく人がいる。男性女性、もしかしたら小さな子どもも。ギルドよりは少ない数だろうけど、年齢層は広い。

展望台で大胆になれたのは人がいなかったから。寝ているからってどこでもあんなに積極的になれるわけじゃなかった。

それに教会ということは……。

「着いたよ。ドアを開けるね」

白い建物にある橙色の扉を開く。エルレオの魔法によって屋内が灯された。

「っ！」

両サイドに長い椅子が並べられ、中央から奥の祭壇までは通路。フロア全面が赤い絨毯で埋められている。

中にはざっくり 20 名ほどの老若男女が眠っていた。祭壇の前では若い牧師が倒れている。

「奥まで行こうか」

「ほんとに……？」

手を引かれて真っ直ぐ進む。背後で大きな音を立てて閉まった扉が、逃げ道がないことを教えてくれた。

「祭壇の前にベッドを置くのも風情がないね」

「うん？ うん……」

エルレオは周りの人達を一切気にせず、早くも H する腹積もりでいるらしかった。

「それじゃあとりあえず、ここに座ろうか」

「うん……。えっ?!」

奥の大きなステンドグラスと祭壇を背にするようにたった1つ椅子を置かれる。2つではなく1つ。「オレの膝の上に座って」

「……………」

先に座ったエルレオは自分の膝を叩き、手を引っ張って誘導してくる。勃ち上ったおちんちんに自然と目が行ってしまった。

「あっ……。やっ……」

躊躇していると腰に手を回されて無理矢理座らされる。身体の向きを垂直にすると同じ向きに直された。

「ほら、前を見て……」

「！！」

寝ている人達と向かい合う形になっていた。胸もショーツも丸見え。同じ空間にいるだけでなく、起きていた時の視線の向きまで……。

まるでそういったショーのような恰好であった。神聖な場所で脱いでいる私達はただの変質者だ。

「やっ！ 足が……！ 閉じてっ！ 恥ずかしい！」

閉じていたエルレオの膝が開いて、それに連動するように、足を外側に置いていた私も股を開かされた。

股を手で隠そうとするとエルレオのおちんちんが当てってそれも恥辱感を積もらせた。

「誰も見てないからもっと大っぴらにして良いんだよ」

「そうだけど、そういう問題じゃ……！」

そもそもこのポーズ自体が恥ずかしかった。人に見られていなくても。この場所じゃなくても寝ている人の前でこんなポーズなんてできない。

「椅子に座ったままじゃHしづらいから、これを使って気持ち良くしてあげるね」

「っ！ そ、それって……！」

本で読んだことがある。実物を見るのは初めてだ。河川に落ちているような角の無い丸石で、大理石のようにきらりとしている。

その怪しい石は、エルレオの指の中で大きな振動音を鳴らしていた。

「闇市でゲットしたんだ。魔導感知式鉱石。落とし

物防止のグッズだね。けど別名はエッチバイブ。効き目はどうか」

「待って……。お願い……。んんっ！！」

バイブを下着越しの恥部に押し当てられ、予想以上に感じてしまう。

女の子を辱めるような物語や、現実でも女の子が1人でする時に使う人が少なくないと言うがここまで強い刺激が来るとは思っていなかった。

「結構良い感じだね。ほら、みんな見ていると思って」

「あんっ！ ダメッ！ んっ！」

バイブを持つ手を抑えるが、秘部の周りで円を描くように思うような抵抗にならない。感じてしまっ
てろくに力を入れられなかった。

足を閉じることもできず、オモチャで感じさせられるしかなかった。

「あああ！！」

クリトリスに押し当てられ、叫びが教会全体に響いた。

ショーツがびっしょり濡れてしまう。

「これ、魔力さえ流したらオレの手から離れても振動するんだ」

「えっ？ やだっ！ あっ！！」

手を自分の背中の後ろで組まされる。ついに魔法で拘束されてしまったのだ。

そしてバイブをショーツの中に落とされる。ショーツの中で、バイブが意思を持ったかのように私のおまんこをいじめる。

「あっ……！ やめてっ……！ あっ！」

人前で責められ抗えず、拘束されて自由を奪われ、イクまでこのままなのかと絶望する。人の手から離れたバイブは振動するだけで、押し当てられた時のような強い刺激はなく、案外絶頂には時間がかかりそうだというのも辛い要素だった。

感じているのにイキ切れない。いっそイカせて欲しいと懇願しそうになっていた。

「そういえば、あと2つ持ってるんだった」

「！！！」

エルレオの両手にはまた新たなバイブが握られていた。

「あ……！ 待って……！ 怖い……。だめっ……。んんっ！！」

焦らすように近づけられ、当てる際には強く乳首を刺激した。

「んっ！ んんっ！」

感度が上がってしまう。

初めて、オモチャでイカされる。誰も目を開けていないのに、衆目晒されているような気がしてしまった。

「あっ……。んっ！ イク……。！！！」

絶頂を迎え、愛液が床に滴り落ちた。

拘束を解かれ、ショーツに入れられていたバイブも取られる。

前がかりに倒れそうになったところを支えられ、エルレオにもたれかかる。

「酷いよ……。本当に恥ずかしかったんだから……」

「ごめん、ごめん。ずっといつ使おうか迷ってたんだけどこんなに感じるとは……。悦んでくれてなにより」

「喜んでなんか……。あっ……。！」

悪びれる様子なく、それどころか私を支えながら
ちゃっかり胸を揉んで、さらにショーツの中に手を入
れてきた。

「まだ、するの……？」

「オモチャと、オレのちんぽ、どっちが気持ち良い
か試さないかね」

自分で持ち寄ったバイブに対抗心を燃やし、私の
足も開いたままでいた。

「もう十分濡れてるね。これならすんなり入りそう」

「やあ……」

ショーツの中でくちゆくちゆと水音を確認した
エルレオは、そのままショーツを脱がせて消してお
まんこを露出させた。

入れやすくするため、開いていたエルレオの足が
わずかに閉じる。

今なら自分の足を閉じて股を隠すこともできる。
しかし、私はしなかった。

「自分で入れてみる？」

「っ……！」

今まであれほど拒否していたのに、自分からおち

んちんを握って入れるなんてあり得ない……。普通なら……。

拒否してもどうせ挿入れられる。正面から股を隠しても無防備な後ろから挿入れられる。というのは建前で、口では拒否しながらも心の中では私も気持ちの良いことを望んでいた。

「ゆっくりでいいよ」

自ら腰を浮かせて、握ったおちんちんをおまんこに押し当てる。滑らないようにゆっくりと穴に差し込んだ。

「んっ……。んんっ」

「よく入れれたね。偉いよ」

人に入れられるのと自分で入れるのとでは感覚がまるで異なった。怖さからして違う。自分するのは、膣口に来る異物感や広がっていく感覚が怖くて、痛くともエルレオに入れてもらう方が気が楽に思えた。

挿入されたならすることは同じ。

「一緒に気持ち良くなるうね」

「あんっ……。ん……。んっ！」

座ったまま跳ねるような動きでおまんこを突いてくる。上へ飛ぶ際も、下に落ちた時の反動も愛液でならされたおかげでスムーズに動き、お互いに気持ち良くさせた。

胸やクリトリスを撫でられ、子宮を突かれ、全身が痺れる。

「バイブとどっちが良い？」

「んんっ！ わかんな、いっ……。あっ！」

「そっかあ……」

私の反応が不服だったのか、それともいたずら心か、背後でバイブの音が鳴る。

「あっ！ ダメッ！」

クリトリスの先端に当てられる。押し込まずソフトにあくまでSEXの補助のような扱い方で、私の絶頂までの道のりを短くする。

「んっ！ あっ！！」

「やっぱり、バイブの方が好きなのかな」

「ちがっ！ あっ！ ああ！！」

明らかに感度が増したことを不満気に呟かれる。私も私で、オモチャにイカされる屈辱感からなる

べく認めたくなかった。

それでもイってしまうのはどうしようもなかった。

「なんてね。オレも限界……。一緒にイこうか」

「んっ！！ んんっ～～～！！」

イったばかりなことを忘れて思い切り絶頂してしまう。注がれる精液が人形のものとは似つかず熱かった。

身体が痺れて顔の角度が上がる。信仰心を持って教会を訪れていたこの人達への罪悪感が、そのいけない気持ちが、余分な愛液に変換された……。